



日本童話祭(久留島武彦顕彰)

第四十二回全国児童生徒俳句大会

入賞・入選句集

選者

牧野 桂一先生

秋篠 光広先生

きゅうだいほんせん JR久大本線
ぶんごもりえき 豊後森駅

九州・沖縄から



第四十二回全国児童生徒俳句大会によせて



全国児童生徒俳句大会実行委員会顧問

大分県玖珠町長 宿 利 政 和

大分県玖珠町は、人が人として共に生きていく上で、必要な教えを楽しいお話にのせて、子どもたちに語り聞かせた久留島武彦の考えを引き継いだ、「童話の里」づくりに取り組んでいます。昨年、久留島武彦生誕一五〇年を迎え、様々な事業の中で、久留島武彦精神に基づいた「信じあい 助け合い 互いに違いを認め合い 共に生きていくまちをつくること」に取り組んで参りました。

この全国児童生徒俳句大会も、日本童話祭（久留島武彦顕彰）協賛行事として、昭和五十九年（1984年）五月五日に第一回の表彰式が行われ、今年で四十二回目を迎えました。今大会は、四、九七六人の児童生徒の皆さま方から、一一、六三四句もの投句をいただきました。ここ十数年は国内にとどまらず海外のアメリカや台湾の日本語学校からも応募いただく大会となっており、四十二回目を迎えた今大会で、累計投句数が五十万句を突破しました。まさに久留島武彦の座右の銘である「継続は力なり」が受け継がれた歴史ある大会となっています。

俳句は季節の風景を五・七・五で詠む、世界で一番短い定型詩です。短い文字数の中に自然への憧憬と感動、畏怖が詠み込まれています。今回の作品の中にも、豊かな自然に目を向け、何気ない日常に心を寄せて表現した作品や平和な世界を祈る作品などが見受けられました。

この句集を手取る皆さまは、投句いただいた児童生徒の豊かな感性に触れ、育ちゆく子ども達の明るい未来を確信することでしょう。厳正な審査の結果、受賞された皆さま、入選された皆さま、おめでとうございます。選句にあたっては、とりわけ長きにわたり携わっていただいております選者の牧野桂一先生、そして俳人協会評議員秋篠光広先生にご尽力をいただきました。ご多忙の中にもかかわりませず、誠にありがとうございます。

この大会を通して、児童生徒の皆さまが、豊かな心を育み、未来に向かって健やかに成長していくことを願っています。今後もここ玖珠町が「童話の里」として、児童文化の振興に寄与していくことをお約束し、玖珠町を代表してのあいさつと致します。

令和七年五月四日



入賞句

日本童話祭（久留島武彦顕彰）
第四十二回全国児童生徒俳句大会

日本童話祭

大空を舞うジャンボこいのぼりとくぐりぬけ

久留島 武彦 賞

どんぐりをたくさんとってかわいがる

大分県
玖珠町立八幡小学校 1年
平井 悠聖

朗 人 賞

春の池弾む水音ぱぴぷぺぽ

大分県
玖珠町立くす星翔中学校 3年
佐藤 愛香

紘 文 賞

宿題も課題もあとで十三夜

東京都
中央大学杉並高等学校 2年
齊藤 堇

桂 一 賞

ぞうのはなえさをもち上げ秋の空

大分県
大分市立大在小学校 2年
林 叶翔

大分県知事賞

〔小学生の部〕

こいのぼり世界の平和見つめてる

鳥取県

大山凛恩

鳥取市立美保小学校 3年

〔中学生の部〕

炎天下それでも走る駅伝部

大分県

川邊虎次郎

臼杵市立東中学校 3年

〔高校生の部〕

医学部か経済学部か蝌蚪の国

岐阜県

杉山慶多

鶯谷高等学校 2年

大分県教育長賞

〔小学生の部〕

啄木鳥や樹木の命を守る医者

台湾

吳祐安

崇華小学校 3年

〔中学生の部〕

うとうととがんばる姉の夜学かな

福岡県

佐伯柚葉

古賀市立古賀東中学校 1年

〔高校生の部〕

ラムネ瓶しゅわっと夏が始まった

徳島県

高田匠輔

徳島県立脇町高等学校 3年

玖 珠 町 長 賞

〔小学生の部〕

サンガラスめがねの形で日やけした

大分県

山 口 市 路

玖珠町立森中央小学校 4年

〔中学生の部〕

美しい君のまつげに積もる雪

大分県

穴 井 美 楽

玖珠町立くす星翔中学校 1年

〔高校生の部〕

理論派の歴史教師の夏帽子

鳥取県

岩 田 侃 大

湯梨浜学園高等学校 2年

玖 珠 町 議 会 議 長 賞

〔小学生の部〕

夏の海かがやいている沖縄だ

埼玉県

廣 瀬 麻 結

川口市立元郷南小学校 5年

〔中学生の部〕

玄関で母につかまるカブトムシ

東京都

奥 津 太 郎

品川区立伊藤学園 9年

〔高校生の部〕

朝顔と祖母の微笑み重ね浮く

徳島県

藤 見 叶 星

徳島県立脇町高等学校 3年

玖珠町教育長賞

〔小学生の部〕

公園の落ち葉をけって逆上がり

群馬県

関川 來 珠

高崎市立城東小学校 4年

〔中学生の部〕

いわし雲ホウキで散らす反抗期

三重県

山田 凛

多気町松阪市学校組合立多気中学校 3年

〔高校生の部〕

プレゼント大事な人へと編むマフラー

大分県

大戸 朝 陽

日本文理大学附属高等学校 1年

大分県俳句連盟会長賞

〔小学生の部〕

はなびしてみんなであそんだばあばんち

福岡県

日 高 けん太

飯塚市立鯉田小学校 1年

〔中学生の部〕

ひぐらしの声をすり抜け帰路につく

大分県

秋 好 泰 雅

玖珠町立くす星翔中学校 3年

〔高校生の部〕

水槽に貼り付く額めだかの子

岐阜県

廣 瀬 ももこ

鶯谷高等学校 3年

大分県小学校長会賞

信長が好きな干し柿あといっこ

北海道

星

環汰

小樽市立山の手の小学校 4年

大分県中学校長会賞

夏休み平和の鐘が鳴り響く

福岡県

白濱颯琉

筑紫野市立筑山中学校 2年

大分県立学校長協会賞

シャーペンを返せぬままに夏休み

大分県

久保田彩花

楊志館高等学校 3年

読売新聞社賞

絵手紙は青い地球よしゆうせん日

大分県

小野咲結季

宇佐市立豊川小学校 3年



第42回全国児童生徒 俳句大会に寄せて

選者 牧野 桂一

全国児童生徒俳句大会が、今年も海外からの応募も含め、四、九七六人から一、六三四句もの投句を得て、盛大に行われますことを、私たち選者も大変嬉しく思います。

例年このように「日本童話祭」に協賛して行われる全国児童生徒俳句大会は、今年で四十二回目を迎えます。そして、第一回大会から今回の第四十二回大会までに、全国からこの大会に投句していただいた俳句の数は、五十万句を超えました。考えてみると、この五十万句という投句数は、他の児童生徒を対象とした俳句大会の投句数に比べても、群を抜いて多くなっています。これだけ大きな規模で、四十年を超える長い間、一回も休むことなく俳句大会を続けている所は他に例がありません。このように全国児童生徒俳句大会が盛大に開催できますことを、この大会に投句していただいた皆様方とともに、運営を支えていただいている方々に感謝し、共に喜び合いたいと思います。

今回の大会において、全国の小学校、中学校、高等学校の皆さんの他、台湾の崇華小学校並びにアメリカのワシントン日本語学校からも貴重な作品を寄せていただきました。寄せられた一人一人の作品には、それぞれの国や地域の自然の美しさと人々の優しさが満ちあふれていました。そこには、日々の生活の中で実際に体験したこと、発見したこと、平和や戦争や災害に関して学んだこと、友達とともに活動したこと、そして嬉しかったこと、

悲しかったこと、辛かったことなど周りの人に伝えずにはいられなかったことが、感動的にそれぞれの言葉で詠み込まれていました。

このような全国の皆さんの作品には、それぞれの地域と風土に根ざした感銘深い体験や平和を願う切実な活動が、五七五という俳句の伝統的なリズムに乗せられ、若々しい希望に満ちた感性で訴えられており、読む人を力強く励ましてくれます。

またこれらの作品には、投句者の皆さんが、学校や公民館の俳句教室の中で素敵な仲間と共に魅力溢れる素敵な先生に出会って、楽しく俳句を学んでいる姿も生き生きと伝わってきました。それらの一句一句を丁寧に読んでいくと、私たち読者も次の世代を受け継いでいく皆さんと同じ時代を生きていることを確かに実感させられ、未来を共に生きていく勇氣が湧いてきます。そして、ここに寄せられた作品には、八十六年の生涯のうち六十年もの間、「お話は子どもの生命の糧だ」という信念のもとに、世界中を隈なく歩き、子どもに夢と希望と勇氣を与え続けてくれている久留島武彦先生の深い思いがしっかりと受け継がれており、とても嬉しく思います。

今回もこのようにして寄せられた一人一人の作品を直接読む貴重な機会を与えていただきましたので、その感謝も込めて、入賞した作品の幾つかについて、私の感じたことを紹介させていただきます。作品が創り出す素敵な世界を共に味わってみたいと思います。

久留島武彦賞

どんぐりをたくさんとってかわいがる

玖珠町立八幡小学校 1年

平井 悠聖

ここに出てくる「どんぐり」は、秋の深まる頃に、クヌギやナラ、カシの木のある雑木林に行くと、たくさん見かける先っぽのどがった丸い帽子をかぶったとても可愛い木の実のことを言います。このどんぐりには、大きな丸い形をしたクヌギのどんぐりや、クヌギと比べるとちよつと細長いコナラのどんぐりなどがあり、私たちにとっては身近な親しみやすい木の実です。

このどんぐりは、私たちの身近にある童話にも時々出てきて、読む人を喜ばせてくれます。宮沢賢治の『どんぐりと山猫』のように、どんぐりが人間のように描かれていて、話の中に引き込まれるような面白いものもあります。

「どんぐりをたくさんとってかわいがる」という俳句を見ると、悠聖さんがどんぐりたちととても楽しく遊んでいる姿が浮かび上がり、私たちもその中に入って一緒に遊んでみたくなります。その楽しい遊びは、童謡の「どんぐりころころ」にも広がり「どんぐりころころどんぶりこ おいけにはまって さあたいへん どじょうができて こんにちは ほっちゃんいっしょにあそびましょう」という童謡の世界にもつながっていきます。

この俳句でも、悠聖さんは「たくさんとってかわいがる」と言うように、どんぐりを弟のように可愛がる様子が浮んできて読む人の心を温かく包んでくれます。

悠聖さんは小学一年生ですので、学校の中ではお兄さんお姉さんに、どんぐりのように優しくしてもらっているのかも知れませんね。

朗人賞

春の池 弾む水音 ぱびゅぽ

玖珠町立くす星翔中学校 3年 佐藤 愛香

この俳句は「春の池」という季語が大きな働きをしています。夏の池でも秋の池でも、ましてや冬の池でもありません。冬が明けて暖かくなり、生きているものがみんな目覚め始める、まさに「春の池」なのです。

私はこの上五に置かれている「春の池」を目にして、真つ先に「はるになれば し」がこもとけて どじょつこだの ふなつこだのよるがあけたと おもうべな」という歌が浮かんできました。そしてそのイメージは「弾む水音 ぱびゅぽ」という弾んだフレーズに広がり、私たちを楽しく春の池で遊ばせてくれます。「ぱびゅぽ」という弾んだ音は、「春の池」に生きる生き物たちと共に楽しく遊ぶ愛香さんの姿にも広がり、楽しく弾んで踊っているようにも見えてきます。春の池に弾む水音を「ぱびゅぽ」と受け止めたところに、愛香さんの詩人としての感性が見られ、とても印象的です。

「ぱびゅぽ」というような音の表現を、詩や俳句では「オノマトペ」と言うのですが、ここではその「ぱびゅぽ」が、「春の池」ととてもよく響き合い、春が来て弾んでいる愛香さんの楽しい気持ち伝わってきます。

絃文賞

宿題も課題もあとで 十三夜

中央大学杉並高等学校 2年 齊藤 董

この俳句は「十三夜」という美しい秋の季語が主題になっています。この「十三夜」とは、陰暦の九月十三日の夜のことです。また、この日の夜に見られる月のことも言います。陰暦の八月十五夜に見られる満月を名月と言いますが、次の九月に見られる十五夜の満月の二夜前の欠けた月のことを「十三夜月」と言います。盆の月、中秋の名月に次ぐ、この秋最後の美しい月であることから「名残の月」とか「後の月（のちのつき）」などとも呼ばれ、豆や栗などをお供えすることから豆名月、栗名月とも言われています。

「宿題も課題もあとにする」ことが、今年最後の月を愛でる「十三夜の月」と重なり、味わいはいつそう深くなります。そしてそれは、満月の二日前のまだ少し欠けた所のある「十三夜月」とも響き合います。それは宿題や課題もあと回しにしても見ないではいけない「十三夜」の美しさにもつながっていくのです。

私たちの生活は、油断をすると毎日同じように心に留めることもなく過ぎてしまうのですが、実は一日一日、私たちにとってはかけがえない今日の一日なのです。俳句の中で出会う「十三夜」は、自然の営みの中で「その日しかない一日」として、私たちに一日一日の大切さをしみじみと教えてくれます。

桂一賞

ぞうのはなえさをもち上げ 秋の空

大分市立大在小学校 2年 林 叶翔

この俳句は、象があの特徴な長い鼻を使って持ち上げながら餌を食べる姿を見て、そのしぐさに胸を躍らせながら、ドキドキしていることをとても素直に表現しています。鼻を上手に使って餌を空に向かって高く持ち上げるのは、側で見えないと気づくことのできない象だけの特徴です。「天高く馬肥ゆる秋」とも言いますので、象も食欲が旺盛で、絶えず間なく餌を鼻で持ち上げながら口に運び、一生懸命に食べているのでしよう。ここでの「秋の空」は、そのことをよく伝えてくれます。

この秋の空は、この俳句では「食欲の秋」と言うような特徴のある秋の季語として働いていますので、夏の空でも冬の空でも春の空でもない象の食欲をそその、高く澄みきった秋の空なのです。ちなみに秋の空と言う季語は、天高く澄みきった空を言い、台風の後などからりと晴れ上がり、爽やかな食欲を誘う空となります。

俳句では、季語はとても大切な働きをしますが、このように季語の特徴をしつかりと踏まえて使うことは、なかなかできるものではありません。まさにこの俳句は、「秋の空」で一句が成り立っていると言ってもいいくらい季語がよく働いています。ちなみにここで「秋の空」は、他のどのような言葉にも置き換えることはできません。このように他のどのような言葉にも置き換えることができない言葉の組み合わせのことを、俳句では「言葉が動かない」と言って高く評価されます。

大分県知事賞（小学生の部）

こいのぼり世界の平和見つめてる

鳥取市立美保小学校 3年

大山 凜恩

この俳句は「世界の平和」が大きなテーマになっています。最近の報道でも、連日ヨーロッパのウクライナ、中東のガザ地区などで見られる堪えられないような無惨な戦争の現実が、日々伝えられています。このような戦争を、世界の人々は平和への祈りを込めて見つめています。その「戦争と平和」を、こいのぼりと共に空高く見つめているのです。

この俳句では、最初の五音に屋根より高い「こいのぼり」が出てきます。この「こいのぼり」は、男の子の健やかな成長を祈って、五月五日の子供の日（端午の節句）に立てる鯉の形をした「のぼり」のことを言います。生命力の強い鯉のように生まれてきた男の子も、平和な世界を元氣いっぱい、たくましく育ってほしいという願いを込めて、大空に泳がせるのです。

この俳句は、この「こいのぼり」の五音でいったん切れています。これを俳句では「切れ」と言います。つまり大空に「こいのぼり」が泳いでいる風景が強く打ち出されて、そこで切れているのです。その風景の中で、「世界の平和見つめてる」というフレーズが出てきます。ここでは、上五に「切れ」が入っていますので、この「世界の平和見つめてる」のを「こいのぼりだけである」と短絡的に結びつけて読むものではありません。俳句としては「世界の平和見つめてる」のは、作者であり、作者につながる多くの人々と読むのです。もちろんそのさまざまなものの中には「こいの

ぼり」も入っています。そのように読んでくると、この俳句は世界中の人々の平和への思いを、包み込むように大きく広がってきます。

この作品が書かれた二〇二四年には日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）の「世界の平和を見つめる願い」は世界の人々に認められノーベル平和賞を受賞しました。こいのぼりに託して見つめ続けてきた世界平和の願いは今、世界中の人々の願いとなって大空を泳ぎ続けているのです。

大分県知事賞（中学生の部）

炎天下それでも走る 駅伝部

臼杵市立東中学校 3年

川邊 虎次郎

この俳句は、真夏の太陽の照りつける中で駅伝部の部員たちが、猛暑にも負けずに駅伝の練習をしている真剣な姿を描いています。ここでは特に、「それでも走る」と言う中七のフレーズが、「炎天下」と言う季語の働きを受けて、練習に取り組む一人一人の真剣な姿を浮かび上がらせ、選手たちの噴き出している汗まで見せてくれています。ここでの「炎天」と言う季語は、太陽の日差しが強く、焼け付くような真夏の空のことを言います。一方「炎天下」とは、その炎天の下のこと、

焼き付ける強い太陽の日差しの下のことになり、「炎天」とは異なり駅伝部が練習をしている地上のことを表します。したがってこの俳句では、練習をしている駅伝部に焦点を絞っていることとなります。そのことが、練習に打ち込む一人一人を浮かび上がらせ、たすきの受け渡し場面まで読む人に想像させてくれるのです。

ここでもう一つのテーマとなっている「駅伝部」のことですが、ここでの駅伝と言う競走は、各走者が競技用の「たすき」を身に付けてスタートし、「中継所」までの区間を走り、次の区間の走者にたすきを渡し、チームとしてゴールを目指します。各走者が走る距離や総距離、区間数の組み合わせは、駅伝の競技大会によっていろいろあります。

この駅伝は日本独特のもので、古くは日本書紀にも記載されているほど昔から行われていたものです。近年までは日本でしか行われていませんでしたが、最近ではハワイ、グアム、ベルギー、ニュージーランド、オーストラリア、カナダ、シンガポールなどでも行われるようになりました。この駅伝が俳句の中で取り上げられていることが、全国児童生徒俳句大会としても、とても意味のあることだと思っています。

大分県知事賞（高校生の部）

医学部か経済学部か蝌蚪の国

簗谷高等学校 2年

杉山 慶多

この俳句は、眼前の「蝌蚪の国」がテーマになっています。この「蝌蚪の国」と言うのは、あまり聞くことがないかも知れませんが、俳句では時々出てきます。まず「蝌蚪（かど）」とは、古い中国から来た言葉で、一般的には「おたまじゃくし」のことを言います。おたまじゃくしはたくさん群れて泳いでいるので、それを一つの国を作っているように見立てたものなのでしょう。おたまじゃくしは卵から尾を振って飛び出すとき、卵の中で一括りにされていた一匹一匹が独立していくよ

うに見えるので、あの無数にも見える大きな群れは、俳人には一つの国のように見えたのでしょうか。

慶多さんは、そのおたまじゃくしを見つめていると、私たちと同じ人間のように見えてきたのです。その中には、慶多さんと同じように進路に悩むおたまじゃくしもいるように見えます。ですからここでは「おたまじゃくしの群れ」ではなく、敢えて「蝌蚪の国」と言う言葉を使っているのです。そのワイワイガヤガヤ群れて騒いでいるように見えるおたまじゃくしたちを、慶多さんと同じように、これからの進路を「医学部か経済学部か」と真剣に議論しているように見えます。そう見え始めたとき「おたまじゃくしの群れ」は「蝌蚪の国」と言う言葉に変化してきたのです。

大分県教育長賞（小学生の部）

啄木鳥や樹木の命を守る医者

台湾崇華小学校 3年

吳 祐安

「啄木鳥（きつつき）」とは、くちばしで樹の幹をつつき、樹の皮の下や樹の芯にいる虫を食べるキツツキ科の小げら、青げら、赤げらなどの鳥のことをまとめて言います。木をつつので「きつつき」と呼ばれるようで、漢字では「啄木鳥」と書いたり「木突」と書いたりすることもあります。日本では秋の終わり頃に雑木林などについて目に付く色と、餌を採るときの木をつつく音に特徴のある鳥です。最近は見かけることが少なくなつたと言われていますが、森の中に入って散策をしていると時々見かけます。この俳句では、この啄木鳥を「樹木の命を守る医者（樹木医）」

と重ねてみているところに祐安さんの独特な見方があります。

ここで言う樹木の命を守る樹木医とは、「樹木の調査・研究、診断・治療、公園緑地の計画・設計・設計監理などを通して、樹木の保護・育成・管理や倒木などによる人的・物損被害の抑制、後継樹の育成、樹木に関する知識の普及・指導などを行う専門家」のことを言いますが、この俳句では、啄木鳥が樹木医の働きをしているように見立てているのです。この俳句を読んで、台湾でも身の回りの豊かな緑を「文化財」として守る環境運動が根付いていることを知ることができ、とても共感し私たちにも励みになります。

大分県教育長賞（中学生の部）

うとうととがんばる姉の夜学かな

古賀市立古賀東中学校 1年

佐伯 柚葉

この俳句は「夜学」と言う季語が俳句のテーマになっています。夜学とは、定時制の高校、大学等で夜間に学ぶことを言います。本来夜学そのものには季節感はないのですが、夕刻から一つの灯に集まって学ぶものですが、「灯火親しむ夜長」と言う言葉があるように、落ち着いて勉強するには秋が適しているので、俳句では「秋の季題」として位置づけられています。

柚葉さんは中学一年生ですので、この俳句に出てくるお姉さんは高校生くらいでしょう。か。お姉さんは夜遅くまで学校で学び、それから家に帰ってから、「うとうと」としながら「頑張つて勉強をしているのです。この俳句では、お姉さんの頑張る姿を温かい目で見

つめている柚葉さんの姿も浮かんできます。そこには、青年期に成長している二人のきょうだい愛も伝わってきて、改めて家庭生活の中でのきょうだいの関わりの重要さを感じさせられます。

この俳句では、「うとうと」と言うお姉さんの細かい描写が、お姉さんへの深い「きょうだい愛」を表現しています。このように俳句では、短い言葉でも人間の豊かな心を深く描写することができることを教えてくれます。

大分県教育長賞（高校生の部）

ラムネ瓶しゅわつと夏が始まつた

徳島県立脇町高等学校 3年

高田 匠輔

この俳句は「ラムネ瓶」と言う夏を象徴する季語が俳句の中心になって、最も夏らしい感動を表現しています。ここでのラムネとは、レモンの香りや甘味を炭酸水に加えた炭酸飲料の一つです。瓶の口にガラスのビー玉が栓の代わりにはめられており、飲むときは瓶の中にこれを押し込んで飲みます。このラムネ玉を押し込むときに独特な「しゅわつ」と言う音を立てるのです。この俳句では、ラムネ好きな人にとっては、たまらない心地の良い「しゅわつ」と言う一瞬の爽快な音を切り取って、一句に仕立てています。まさに俳句が「瞬間の文学」と言われる所以です。この切り取られた一瞬は、「夏が始まつた」というフレーズで永遠の時間につながっていきます。そしてこの「しゅわつ」という音は読む人にもその経験を引き出し、共感を誘うのです。俳句では一般的に「ラムネ瓶」と「夏が始

まった」のような二つの季語が重なることを嫌う傾向がありますが、ここでは「ラムネ瓶しゅわっと」が一気に「夏が始まった」につながっていますので、季重なりがむしろ有効に働いて、夏の始まる一瞬を鮮やかに表現することができています。

玖珠町長賞（小学生の部）

サングラスめがねの形で日やけした

玖珠町立森中央小学校 4年 山口 市路

この俳句は「サングラス」が主題になっています。太陽の日差し強い中、サングラスをかけていたら、そのサングラスのあとが日焼けとして残ったのです。ここでは、このサングラスと言う言葉が、季語としてしっかりと位置付いて市路さんの日焼けした姿を描き出しています。

サングラスは一般的には、屋外での強烈な太陽の光線に対して目の保護のために使われるもので、黒い色で日差しを避けるように加工しためがねですが、ファッションの一つとしてもかけることがあります。市路さんは、「めがねの形に日焼けした」と言うことで、かなり長い間強い日差しの中にいたことが分かります。そのような状況を考えると、真夏の太陽の中ですので、海水浴に出かけていたのかもしれないね。

市路さんは小学四年生ですので、日常生活の中では、そんなにサングラスをかける機会はないと思いますので、サングラスを外したときに「めがねの形に日焼けしている」自分の顔を鏡で見てびっくりしているのではないのでしょうか。市路さんのその時の驚きが、

そのままこの一句になって読む人にとってもよく伝わってきます。この俳句は、そこで感じた感動を具体的に目に見えるように言葉で表現することが大切であることを私たちに教えてくれています。

玖珠町長賞（中学生の部）

美しい君のまつげに積もる雪

玖珠町立くす星翔中学校 1年 穴井 美奈

この俳句は「まつげに積もっている雪」がテーマになっています。何と対象物の小さいことでしょうか。この俳句は、これまで四十二回の入選作品の中でも、最も小さなものを描いている俳句のように思います。しかし、その小さいまつげに積もる雪が、読者にしっかりと見えてきます。そしてその映像が、美しい君をいっそう際立てているのです。

一般的には、俳句の中で「美しい」と言う言葉をそのまま使うと、逆に美しさが見えにくくなることが多いのですが、この俳句では「まつげに積もる雪」のように、細かくしかも具体的に雪に焦点を当てて描きましたので、「君の美しさ」が見えてくるようになります。ここでの「美しい君」と言う抽象的な言葉が、具体的な人間の姿として浮かび上がってくるからです。

ここに出てくる「雪」は、詩歌の中に「雪月花」と言う言葉があるように、数多くある日本の季語の中でも取り分け大切なものとして、古くから日本人に大切にされてきました。従って、雪の俳句は数え切れない程たくさんの方が作ってきましたが、「君のまつげに積もる雪」と言う俳句には、私は初めて出会う

ました。美奈さんは、美しい雪の降る中で、日本人がこれまで大切にしてきた俳句の美意識を踏まえながら「君のまつげに積もる雪」と言う新しい「美しさ」を発見したのです。

玖珠町長賞（高校生の部）

理論派の歴史教師の夏帽子

湯梨浜学園高等学校 2年 岩田 侃大

この俳句は「理論派の歴史教師」と言う固い言葉と麦わら帽やパナマ帽に代表されるような「夏帽子」という柔らかな言葉が取り合わされています。ここでは、いつも授業を受けている身近な教師を「理論派の歴史教師」と表現していますが、これは身近に接していなければ出てこない言葉です。ここでの「理論派の歴史教師」とは、とても短い言葉ですが、高等学校で歴史を教える教師にはぴったりの言葉です。そこには、歴史上の事件の年月日などを一日のズレも無く把握していて、事件と事件の関連性なども正確に捉えて、それを高校生にも分かるように整然と説明する教師の姿が浮かび上がってきます。

一方「夏帽子」とは、概略的に言えば夏用の帽子のことになります。直射日光や紫外線からの日焼けや皮膚を保護するための、つばの広い麦わら帽子やパナマ帽、かんかん帽などがあります。このように見えていくと、「理論派の歴史教師」と「夏帽子」の取り合わせには、少なからず違和感が漂います。この違和感が「理論派の歴史教師」という固いイメージを一転させて、とても親しみのあるユーモアのある教師を思い浮かべさせてくれます。取り合わせによって、夏帽子は本来の意味に

加えて人間味をも醸し出してくれるのです。このような働きを俳句では「取り合わせの働き」と言っても大切にします。

玖珠町議会議長賞（小学生の部） 夏の海かがやいている沖縄だ

川口市立元郷南小学校 5年 廣瀬 麻結

この俳句は、「沖縄の夏の海」がテーマになっています。この作品を読んで、私は真っ先に第四十回俳句大会で文部科学大臣賞を受賞した長瀬みゆさんの「美ら海の平和を祈る蟬時雨」という俳句を思い出しました。沖縄では、この「美しい海」のことを「美らの海（ちゅらのうみ）」と言いますが、この「美ら（ちゅら）」とは、「美しい、清らか」と言う意味を表すそうです。沖縄の海は青く青く、どこまでも透き通っていて、異次元の美しさがあります。まさに「かがやいている」と言う言葉がぴったりの美しい海です。この「かがやいている沖縄の夏の海」には、また私たち日本人にとっては忘れることのできない悲しい歴史があります。

ここに詠われている「かがやく夏の海」に浮かぶ「伊江島」では、一九四五年四月十六日にアメリカ軍が上陸して、家ひとつ残らないように焼き尽くされたのです。この苛烈な戦争で、島の人たちと軍人およそ約三、五〇〇人が犠牲となったのです。そして、米軍が四月二十一日に伊江島を攻略したと宣言した後も、島の住民はガマでの集団自決（強制集団死）によって命を奪われたと言います。『死闘伊江島戦』琉球新報社

このように沖縄での戦争のことをよく知っ

ている人にとって、沖縄の「かがやいている美しい海」は、そのままむごい戦争と結びついてしまうのです。沖縄ではこの戦争を忘れないように、沖縄戦が事実上終結した一九四五年六月二十三日を「沖縄忌」として、平和祈念の式典もしています。ここでの下五の「沖縄だ」には、そのような沖縄に思いを寄せる人々の「平和への願い」が込められているように思います。

玖珠町議会議長賞（中学生の部） 玄関で母につかまるカブトムシ

品川区立伊藤学園 9年 奥津 太郎

この俳句は、虫好きの少年・少女にとってたまらない昆虫の「カブトムシ」が一句の中心に取り上げられています。この「カブトムシ」の名前は、オスにある一対の格好いい角が待のかぶっていた兜の飾りに似ていることからつけられたと言われています。俳句に出てくる漢字では「兜虫」とか「甲虫」「独角仙」などと表記されています。

この私たちが身近で見かける「カブトムシ」は、コガネムシ科の甲虫で体長はだいたい五センチメートルくらいあります。形は縦長い円形でふっくらと膨らみ、体の色は黒褐色で光沢を帯びています。子どもに人気のあるオスの頭の上には、先端が二股になったY字形の魅力的な長い角があります。メスは少し小さめで角はありません。幼虫は堆肥や朽ち木に住み、成虫になると夏に現われ、サイカチやクヌギなどの樹液を吸いに來ます。この「カブトムシ」が、太郎さんの家の玄関に来て母につかまったというのです。

この作品は、書かれている事柄としては「カブトムシがお母さんにつかまった」だけのこの見えるのですが、つかまったものが「カブトムシ」であったことが太郎さんに感動を呼び起こしたのです。お母さんも太郎さんが関心を持っているカブトムシですから、特別な思いを持ってつかまえたのでしょうか。この日、玄関にカブトムシが飛び込んだことが、太郎さん一家にとってはこのような俳句ができるほどの大きな事件になったのです。ここに「カブトムシ」と言う俳句の季語が働いているのです。

玖珠町議会議長賞（高校生の部） 朝顔と祖母の微笑み重ね浮く

徳島県立脇町高等学校 3年 藤見 叶星

この俳句は、季語とともに「祖母の微笑み」が感動の中心になっています。今朝、特別に鮮やかに咲いている「朝顔」が、祖母の微笑みの姿を誘い出してくれ、しみじみと朝顔と重なり合って見えるようになった時、この一句が生まれました。

ここに出てくる朝顔とは、秋の訪れを告げる花で「秋の季語」になっています。花は夜明け前に開いて、昼にはもうしぼんでしまう印象的な花で、日本人はこの朝顔の花に、秋の訪れをしみじみと感じてきました。もともと朝顔は、奈良時代に遣唐使によって薬として日本に伝えられたと言われています。それが江戸時代には、広く観賞用として栽培されるようになり、とても身近な花になってきました。この朝顔は、ちょうど旧暦の七夕の頃咲くので、牽牛星にちなんで「牽牛花（けん

ぎゅうか」とも呼ばれています。

この朝顔と祖母の微笑みが重なることから考えると、叶星さんにとって祖母は特別な存在で、深い愛情を感じていたことが分かります。小学生の頃には、祖母の大好きだった朝顔を一緒に育てていたのかも知れませんが、朝顔日記なども一緒に書いていたのかも知れません。そのような祖母との生活の中で、叶星さんも祖母と同じように朝顔が大好きになり、自分でも朝顔を植えて育てるようになったのではないのでしょうか。そのようなことが、「祖母の微笑み」と言う言葉と「微笑み重ね浮く」と言う愛情に満ちた言葉から想像され、私たちをほのぼのとさせてくれます。

玖珠町教育長賞（小学生の部） 公園の落ち葉をけて逆上がり

高崎市立城東小学校 4年

関川 來珠

この俳句は、「落ち葉」が秋の季語として働いています。來珠さんはその落ち葉の降り積もる中で、落ち葉を蹴って鉄棒の逆上がりをしていいます。この逆上がりは、鉄棒で両足をそろえて伸ばしたまま前に上げ、腕の力を使って体を逆さにして引き上げる技ですが、鉄棒の競技の中では難関の一つで、苦労した人もたくさんいると思います。逆に、練習でこのコツをつかむと、今までできなかったことが嘘のように気持ちよくできるようになります。ここでは、「落ち葉をけて逆上がり」から逆上がりができるようになってまだ間もないことが分かります。そしてこの表現から、コツをつかんで逆上がりができるようになった胸のときめきが伝わってきます。

この俳句で、逆上がりができるようになった胸のドキドキが、こんなにも強く私たちに伝わってくるのは、「落ち葉をけて」という言葉の働きがあるからだと思います。ここが単純に「地面をけて」という表現になっていたなら、このように感動が強く響いてこないと思います。この俳句は読み返す度に季語の力の大きさを考えさせられます。そのように読んでくると、ここでの落ち葉は、食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋というようなことにもつながってきて、來珠さんの成長も見えてくるようです。

玖珠町教育長賞（中学生の部） いわし雲ホウキで散らす反抗期

多気町松阪市学校組合立多気中学校 3年

山田 凜

この俳句は、秋の象徴的な雲である「いわし雲」が季語として俳句の中心をなしています。このいわし雲とは、秋の澄んだ空に斑点のように、まるで鰯（いわし）が群れて散らばり、空に「ホウキで散らした」ように広がる雲のことで、魚の鱗（うろこ）にも似ていることから、鱗雲と言うこともあります。この鰯雲が見られると、鰯の大群がやってきて大漁になるとも言われています。この鰯雲は巻積雲（けんせきうん）のことで、雲自体は氷の細かな結晶で出来ており、高度五キロメートルから十五キロメートルくらいのところに発生します。温暖前線や熱帯低気圧が接近する時に現れるため、天候の悪化の前兆とも言われています。

この俳句のもう一つのテーマとして、中学

生の精神的な特徴としての「反抗期」が取り上げられています。反抗期とは、思春期の子どもが自立に向けて成長していく過程に起こる矛盾や葛藤のギャップのために、外部に対して反抗的な態度をぶつける小学校高学年から高校生になるまでの時期のことを言います。

この俳句では、この反抗期の心の状態をホウキで散らすいわし雲にぶつけています。ここには実際に体験している凜さんしか表現できない複雑な気持ちが描かれていて、読む人の共感を呼びます。

玖珠町教育長賞（高校生の部） プレゼント大事な人へと編むマフラー

日本文理大学附属高等学校 1年 大戸 朝陽

この俳句は、「大事な人へと編むマフラー」が大きなテーマになっています。ここでの大事な人とは、朝陽さんにとってどのような人だろうと思いを巡らせる時、「編むマフラー」と言う言葉が大きなヒントになります。つまり手編みにしてプレゼントしたいと思うような大事な人というわけです。大事な人と言葉で言ってしまうとただそれだけです。その手に編みのマフラーがくっついてくると、その思いの深さは具体的に伝わってきます。

マフラーとは、首周りに巻いて寒さを防ぐ防寒具のことですが、このマフラーを大事な人へと手編みすると言うのです。ここで手編みするのは誰かと考えると、それは一義的には朝陽さんになりますので、そこから「大事な人」へイメージが広がります。その大切な人は、私には朝陽さんと同じ世代の異性のよ

うな感じがしてきます。そのように朝陽さんが心を込めてプレゼントする大切な人のイメージができてくると、手編みしているマフラーのデザインの輪郭まで見え、ほのぼのとした思いも伝わってきて私たちも嬉しくなってきました。

ここでもう一度この俳句を丁寧に読み返してみると、この大事な人はお父さんやお母さん、兄弟姉妹とも読めてきますし、先生などの恩師とも読めなくはありません。ここでの手編みのマフラーにはそのように想像を広げさせてくれる不思議な力があります。俳句はギリギリまで省略して表現していますので、このように様々に読むことができるという特性もあります。

大分県俳句連盟会長賞（小学生の部）

はなびしてみんなであそんだばあばんち

飯塚市立鯉田小学校 1年 日高けん太

この俳句は「ばあちゃんちでした花火」が主なテーマになっています。それも「ばあちゃんち」でしたと言うことと「みんなであそんだ」ことに特別な意味があります。そのことが、けん太さんの胸に深く刻まれており、今もドキドキしているのです。

「花火」と言えば、いろいろな火薬を組み合わせ、夜空に高く打ち上げて爆発の際の光の色や音を楽しむものです。もともとは、秋祭りの奉納として打ち上げられるものですが、この俳句の最初に出てくる「はなび」は、「はなびして」と言っているのです、そのような本格的なものではなく、小学一年生のけん太さんも皆と一緒にできるような「手花火」

だったのでしょうか。夜空に上がる大きな花火は美しいけれども、見るだけで自分たちではできません。でも、ばあちゃんちでした「はなび」は、皆が一人一人自分の手で持つて、目の前でドキドキしながらすることができそうです。それが楽しいのです。そのドキドキがこの俳句になりました。そしてこのドキドキには、大好きなおばあちゃんもそばで一緒にしてくれているという大きなおまけもついています。

またこの俳句では、普通の文章では「ばあちゃんちでみんなではなびをしてあそんだ」と書くところを「はなびしてみんなであそんだ」というフレーズを最初にもつてきて、ひっくり返しているのです。これを俳句の表現では倒置法と言うのですが、このことが、けん太さんの感動を伝える大きな働きをしています。自分の感動を他人に伝えようとすると俳句では、このような工夫ができることを教えられるます。

大分県俳句連盟会長賞（中学生の部）

ひぐらしの声をすり抜け帰路につく

玖珠町立くす星翔中学校 3年 秋好 泰雅

この俳句は、「ひぐらしの声」がテーマになっています。俳句の意味は、その「ひぐらしの声をすり抜けるようにして帰路についた」と言うのです。ここでの「ひぐらし」とは、その名前の通り、明け方や夕暮れどきに鈴を振るような声でカナカナカナと哀しげな響きのある声で鳴く蟬のことを言います。カナカナカナと鳴きますので「かなかな」と言われることもあります。他の多くの蟬は夏の

盛りに鳴きますので、「夏の季語」になっているのですが、ひぐらしは秋の初めに鳴き始めますので「秋の季語」になっています。

この俳句では、ひぐらしの鳴き始める秋の初めの季節感をうまくとらえて「ひぐらしの声をすり抜け」と表現しています。この「すり抜け」と言う描写が、ひぐらしの声と響きあって、泰雅さんの帰路につく様子を見事に言い当てています。泰雅さんは中学三年生です。夏休みも終わりひぐらしの鳴き始める頃は、受験のための勉強も本格的になり、とても忙しくなります。泰雅さんはその忙しさの中で、学校からの帰路につくのですが、その受験勉強で忙しい自分の姿を「ひぐらしの声をすり抜け」と表現したのです。俳句はこの言葉に見られるように、普段の日常生活の中にあるちょっとした変化を独特な詩的感性で捉えることによって、このような魅力的な俳句を生み出すことができるのです。

大分県俳句連盟会長賞（高校生の部）

水槽に貼り付く額めだかの子

鷺谷高等学校 3年 廣瀬 ももこ

この俳句は、水槽の中を泳ぐ金魚を水槽に額を貼り付けて一心に見ているももこさんの姿を描いています。ここで面白いのは、自分が金魚を見ている姿を、もう一人の自分が見ているという書き方をしていることです。このような見方は、なかなかできるものではないのですが、それが見事にできています。そのためにももこさんが金魚を見ている姿は、この俳句を読む人にも自分も一緒に見ているように伝わってきます。このような表現の仕

方を俳句では「客観写生」とも言うのですが、そのことが短い俳句においてはとても大切な役割を果たすことを、この俳句は私たちに教えてくれています。

この俳句でも、日高けん太さんの「はなびしてみんなであそんだばあばんち」の説明の中で紹介した倒置法が使われています。ここでは作者の「ももこさんが、一番みんなに伝えたかった「水槽に貼り付く額」を最初にもってきたのです。読者もそれが最初に目に飛び込んでくるので、ももこさんの感動がとて強く伝わってきます。またこの倒置法によって、ももこさんも自分の額についている平たくなった「水槽のあと」にびっくりしている様子が伝わってきます。それはももこさんが、水槽から額を離れた後、水槽の硝子に写っている自分の顔を見た時に気づいたのではないのでしょうか。この俳句の最初に置かれた「水槽に貼り付く額」と言う言葉は、このようなことを次々に私たちに想像させてくれます。

大分県小学校長会長賞 信長が好きな干し柿あといっこ

小樽市立山の手小学校 4年 星 環汰

この俳句は「信長が好きな干し柿」と言うフレーズが特別な働きをしています。環汰さんは、織田信長も干し柿好きであったことを知っているのです。それはきっと環汰さんも干し柿が好きなのではないかと思います。

この俳句を読みながら、私はテレビで放送している「博士ちゃん」の番組を思い出しました。小学四年生の環汰さんが、このような知識を持っているのは尋常ではないと思った

からです。「博士ちゃん」の番組にでてくる歴史博士ちゃんは、大人の人が知らないような細かいことを知っていて私たちを驚かせますが、織田信長が干し柿を好んでいたというように細かい知識も私たちが驚かせます。ちなみに石田三成も柿が好きであったことは、歴史ドラマなどで紹介されたことがありますので、このように俳句として出てきても信長の干し柿ほどには驚かないと思います。

俳句には、このように深い知識によって感動を共有する伝統があります。芭蕉の知識は当時では比較する人がないくらい広くて深かったと言われています。芭蕉のもとに多くの人が集まったのは、そのような知識にも魅力があったのではないかと思います。

もう一つ見逃してはいけないこの俳句の魅力に、最後の五音の「あといっこ」があります。いくつかの干し柿を食べていて、あと一個になってしまった干し柿の存在感への感慨が感じられます。「あと一個になってしまった」としみじみと干し柿を見つめているのです。そして、「干し柿が美味しかったなあ」という満足感も同時に伝わってきます。それらの感慨が「信長が好きな干し柿」と言う言葉を引き出してくれこのような魅力的な一句になったのです。

大分県中学校長会長賞 夏休み平和の鐘が鳴り響く

筑紫野市立筑山中学校 2年 白濱 颯琉

この俳句は「平和の鐘が鳴り響く」という特別な音が大きなテーマになっています。大分県では、夏休みの「八月六日」の原爆忌に、

全県一斉で「平和授業」が行われていて、私も教師をしている時には、この「平和授業」を行ってきましたが、この俳句を読んで、そのことを真っ先に思い出しました。筑紫野市では、夏休みの期間中に「平和の鐘が鳴り響く」ような平和への取り組みがされているのでしょうか。夏休みの八月は、それほど日本人にとって大きな意味があるのです。この平和の鐘の響きを聞きながら、改めて広島、長崎に原子爆弾が落とされたことを振り返り、八月十五日の終戦の日のことへ思いをつないでいるのです。

最近の報道では連日ヨーロッパのウクライナ、中東のガザ地区と無惨な戦争の現実が伝えられています。このような戦争の現実を前に、世界の人々の祈りは「世界の平和」以外にないという強い思いが、ここでの「平和の鐘」には込められているように思います。このような「平和の鐘」の願いが世界中に響き渡れば、平和への思いも世界中で共有され、平和な世界になっていくことも夢ではなくなつてきそうです。私たち大人の中には「戦争を知らない若い世代」の人たちが、戦争に関心が無いかのように言う人がいますが、むしろ若い世代の人たちの方が、戦争や原爆について高い関心を持っていることを教えられます。

「平和の鐘」の響きを、このように尊く聞いてくれる中学生がいることは、私たちのように戦争と平和の問題を、後の世に語り継いでいきたいと思っている大人にとっても、大きな誇りになります。

大分県立学校長協会賞

シャーペンを返せぬままに夏休み

楊志館高等学校 3年

久保田 彩花

この俳句は、彩花さんの「シャーペンを返せぬままに」なっていることへの心のわだかまりが「夏休み」と言う楽しくて胸の膨らむ季語に出会って、高校生らしい心のときめきを生み出し、このような心の内面を描く俳句を生み出しました。俳句はこのように、何でもないような日常を季語と取り合わせることで、初々しい詩心を育てる働きがあります。読む人は、作者が高校三年生であることが分かってくると、ここでの微妙な心理が恋心に育っていった欲しいと言うような期待も抱くようになります。

さてここに出てくる「夏休み」ですが、これは単なる夏休みと言う意味を越えて、彩花さんにとっては特別の高校生活最後の夏休みを意味します。何かの都合で借りたままになっっているシャーペンですが、このシャーペンも、高校三年の今を考えると特別な意味を持ってきます。返してしまえば二人の関係もそのままになっってしまうような気がします。でもやはり返さないままにしておくわけにはいきません。そのようにとまどっている間に、高校生活最後の大切な夏休みに入っている間、とっているのです。もし夏休みに入る前にシャーペンを返して、そこで何かが起これば、高校生活最後の夏休みは彩花さんにとって特別な夏休みになります。この俳句には、そのような高校三年生の物語が秘められています。うで、とても魅力的な作品になっています。

読売新聞社賞

絵手紙は青い地球よしゅうせん日

宇佐市立豊川小学校 3年

小野 咲結季

この俳句は、今多くの人が楽しむ絵手紙が俳句のテーマになっています。咲結季さんは、その絵手紙で「青い地球」を描いたと言うのです。描いているのは小さな絵手紙ですが、その内容は「青い地球」というスケールの大きなものです。ここでいう「青い地球」とは、世界の平和を象徴し人類の未来の理想を表しています。咲結季さんは、そのような「青い地球」を絵手紙で描いているのです。その日はちょうど「しゅうせん日」で、その「しゅうせん日」と言う季語が特別な働きをしています。

「しゅうせん日」とは、昭和二十年八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾して第二次世界大戦が終了し、そのことを天皇陛下が全国民に玉音放送（ぎよくおんほうそう）で伝えた日です。俳句の季語としては「終戦記念日」や「終戦忌」「敗戦忌」などと言っていますが、あえて「敗戦」と言う言葉を避けて「八月十五日」と言うこともあります。この俳句では、「しゅうせん日」と平仮名で書いていますが、そこにはそのような複雑な思いもあつたのかも知れません。「しゅうせん日」には、いろいろな人のいろいろな思いがあるかも知れませんが、咲結季さんは、そのような思いを「青い地球」で統一しました。そしてそれを絵手紙に心を込めて描いたのです。「絵手紙は青い地球よ」と言う時の「よ」の一字には、そのような深い思いが込められているように思います。

ロシアのウクライナ侵攻からもう三年になるうとしています。ハマスとイスラエルの戦争も一年を過ぎました。終わりの見えない戦争で死んでいく人の数や負傷していく人の数は増えていくばかりです。「早く終戦を」と願い、平和な「青い地球」を取り戻していきたいと言う咲結季さんの願いが、一日も早く実現してもらいたいと私たち読者も願わずにはいられません。

俳句の特性とその理解

第四十二回全国児童生徒俳句大会の入賞作品の選評を終えるにあたり、募集作品の全般的な特徴とともに、一一、〇〇〇句を超える皆さんの作品を選句し、選評を書いていく中で気づいたことがいくつかありますので、皆さんとともに考え、俳句を作ることの意味や楽しく俳句を作る方法について、お話しさせていただきます。

俳句を楽しく作るために

毎年多くの皆さんが、この俳句大会にたくさん作品を寄せてくれています。またそのために、多くの先生方や指導者の皆さんが、俳句を作ることを通して子どもたちと関わり、子どもたち一人一人の個性を認め、良さを引き出し、豊かな感性を育みながら表現力を伸ばすことにご尽力いただいていることに感謝しています。そのような人達とともに改めて、私たちが作っている俳句について、「俳句とは何か」「どうすれば上手く俳句を作ることができるか」「俳句を深く鑑賞するには

どうすればよいか」と言うことを、皆さんから寄せられた作品や先人の残された俳句などを参考にしながら、具体的に考えてみたいと思います。

ここで、俳句を作ることで皆さんと共通理解しておかなければならないことがあります。それは、俳句は長い歴史をもつ文学作品という特性から、算数や理科のように何か一つの正しい答えを出すことは難しいと言うことです。なぜかといえば、一人一人に一つ一つの俳句に対する考え方や俳句観があつて、それは少しずつみんな違ってゐるからです。

俳句は自分の感動を表現する

「俳句とはこう言うものだからこのように作る」と言うような固定的な考え方をしたり、人に押しつけたりしないで、俳句に向かうことが大切になります。つまり、俳句を作るときには、十七音で作ることを基本にしながら、見るもの、聞くものなど自分の感動したことを好きなように書き留めていき、それぞれの人の考え方も幅広く受け入れながら俳句を作っていくことが大切になります。「上手であるとか、下手である」とか「俳句になっているとか、なっていない」とかはあまり気にしないで、まず気楽に自由に考えて俳句を作り始めることが大切です。つまり「今、自分がここにこのように生きている」ことを全身で感じ取ることが、俳句を作ることの出発点になるのです。そして自分が今、人間として何かを見て、何かに触れ、何かを聞き、何かを味わい、何かを感じながら生きていることをしっかりと受け止めるのです。そうする

と、それぞれの人の中に自分の想いが湧いてくることに気付くことができます。その想いが、十七音という限られた言葉になつて立ち上がってきます。疑いなく自分が一人の人間としてここに生きているという証が、十七音の言葉として花開いてくるのです。百人百様、それぞれの顔が違つるように、同じものに接していても人の想いはそれぞれ百様の花になつて開くのです。それをうまく言葉で表すこともできれば、うまくできないこともあります。でも心配しないで、それを今の自分の言葉で書き留めておくのです。上手に言えた時より上手に言えなかった時の方が、俳句としては心がこもり、読んでもくれる人の心に素直に伝わることもよくあります。俳句は、十七音しかなくて、言いたいことが思い切つて言えないようなところがありますが、上手に言えなかった時の方が、かえつて多くの想いや感動を人に伝えてくれることもあるのです。

例えば、二〇二三年に行われたワールド・ベースボール・クラシックス(WBC)の準々決勝で3ランホームランを打つて日本を勝利に導いた岡本和真選手は、「ヒーローインタビューで感想を聞かれ「最高です」と一言で答えました。その後、いろいろな場面で何度も聞かれましたが、やはり「最高です」と一言で答えました。六回目に聞かれたときには、胸の想いを言葉にしようと涙をためて言葉を探していました。やはり「最高です」と一杯の真実を込めて一言で答えました。その時球場には、最高の拍手が起こり、その言葉を聞いた観客も最高の感動を受け止めることができました。上手に喋れないことや、多くを喋らないことがかえつて大きな感動を呼ぶ

ことを、私たちに実感として教えてくれました。

俳句は一人称の文学

俳句でもう一つ大切なこととして「俳句は一人称の文学」と言われるように「自分の想いを書く」ことが基本にあります。自分の想いを正直に書こうとすれば、その想いをしっかりと見つめる必要があります。自分の想いを見つめることは、向き合っている対象をよく見つめることにもなります。それは、今まで気づかなかつた自分を発見することにもなるのです。これまでの作品は、このような中から生み出されていますので、一人一人の作品は「他人事ではなく」自分のために自分自身を書いていることにもなつてきます。

俳句は世界一短い詩である

現在では世界中の人たちが俳句を作るようになっていますが、そこで共通になるキーワードが「世界一短い詩」と言うことです。つまり「俳句は世界の最短詩」なのです。俳句は「五七五」の音が基本になるので、世界で一番短い「十七音」の定型詩になります。簡単に言えば「十七音詩」で、本大会の初代選者であつた角川春樹先生は、このような俳句の基本を踏まえて俳句を「魂の一行詩」と表現されています。この短さをこれまでに発表されてきた先人の作品の中で確認していくと、十七音には届かない

咳をしても一人

尾崎放哉

うぐけば、寒い
橋本夢道

草も月夜
青木此君楼

まつすぐな道でさみしい
種田山頭火

という短いものから、十七音を超える

凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり
高浜虚子

たんぽぽたんぽ砂浜に春が目を開く
萩原井泉水

どつと笑ひしがわれには病める母ありけり
栗林一石路

のような長いものであります。つまり俳句の長さは、分かりやすく言えば「一息で言えるくらい」の長さ」になります。高浜虚子はそのことを「俳句は胸にためているいろいろな思いをひと息にもらすようなもの」と言っています。これまでの俳句大会の作品の中には、十七音より短いものや長いものもたくさんありましたが、入賞作品にはほとんどなく、基本的には十七音で表現した作品が中心でした。

俳句は十七音の定型詩

俳句は基本的に、五七五の十七音で構成されています。しかし中には、全体は十七音ですが、七五五や五五七のように読み方がまたがる俳句もあります。十七音で構成されているので、「句またがり」になり、リズムが五七五ではない俳句を「定型」の俳句に対し

て「破調」の俳句と呼ぶこともあります。さらに、俳句の五七五音の定型音律から少しはみ出し、七七五や八七六になっていたり、五六五や五七四などのように字足らずになったりと「字余り」や「字足らず」の句もありますが、それらも一応定型の枠組みの中に入れて考えています。これら破調の俳句も多くの人に親しまれていますので、今回も入選の句に入っています。

俳句は詩である

俳句が「詩」であるということでは、「詩は心を感じたことを、一定のリズムと形式にあてはめて言葉で表したものだ」というので、日常で私たちが使う文章のような散文とは違うことになります。そして俳句を含めた詩は、言葉の表面的な意味だけではなく、美しい言葉で呼びかけて、注意や自覚、良心などを表現する文学の一つの形式になっているのです。また一定のリズムを持つ韻文で、効果的に感動や叙情、心の動きなどを表すための表現上の工夫がなされているものなのです。簡単に言えば俳句は、感動を表現する十七音定型詩なのです。したがって、これまでや今回の入賞・入選作品においても、基本的に「詩」から離れた散文化的な傾向の強いものや説明的な傾向の強いものは入賞・入選作品から外しています。

俳句が「詩」であることの最も大切な条件は、その作者にしかない発見や驚き、悲しみや喜びなど深い「感動」があることです。読む人は、作った人のその感動に共感することによって、自然や人間などについて深く考え

味わうことができるのです。毎回、作品を選句していく中で、日記に出てくるような説明的な作品も多くあります。それらは、読む人には作者の言いたいことはよく分かるのですが「ああそうですか」と受け取ってしまうだけで、作った人の感動が伝わってきません。俳句ではそのような俳句を「ああそうですか俳句」とか「ただ事俳句」などと言います。芭蕉もそのような説明的散文化的な俳句に対して『去来抄』と言う書物の中で「いひおほせて何かある」つまり、「説明しつくしたとしてもそれはなんになる。それは俳句としての価値は認めることができない」と言っていて、説明的な表現を戒めています。ここで、「いい過ぎ」や「説明しすぎ」「散文的になっている」俳句について説明してくれている面白い事例がありましたので、紹介してみたいと思います。

ここで取り上げられているのは「コスモスや」の句で、「コスモスや風に揺れたるころもち」というものでした。同じような句が、本大会の作品にもたくさんあり、よく見かける説明的な句の特徴を表しています。この俳句をよく読んでみると、一見いい句のように見えるかもしれませんが、「風に揺れる」とは「コスモス」と言う言葉の中にすでに含まれているイメージなのです。つまり「いわずもがな」のことなのです。コスモスと言えど、「風に揺れる」「ピンク」「やさしい」「はかない」のような言葉は、誰もが普通に思い浮かべる一般的な言葉なのです。つまり「コスモス」に対して「風に揺れたる」はコスモスの一般的な説明をしているに過ぎないわけ、わざわざ短い十七音の中で言わなくても

いいことなのです。したがって、そのようなコスモスのもつイメージは、「コスモス」と言う言葉に任せてしまい、作者は深入りせず省略することが俳句を作るときには大切なのです。

このような例として昔から「板敷きに下女取り落としたる海鼠かな」と言う俳句が取り上げられてきました。最初の省略は、「板敷きに落としたる海鼠かな」のように「下女」と言う言葉の省略です。それをもっと省略して「取り落とし取り落としたる海鼠かな」と「板敷きに」という言葉を省略するように推敲するのです。

現在では生活が複雑になり、見るもの、聞くもの、感じるものも複雑になっていく中で、言いたいこと、訴えたいことが、十七音の枠を越えるのは当然の成り行きですが、俳句ではその言いたいことを省略して、十七音で表現するのです。そういう意味で言えば「俳句はものを言わない」あるいは「ものが言えない」「省略」の文学と言うことができると思います。

季語について

俳句のもう一つの特性として季語があります。季語とは季節を表す言葉で、俳句では一句の中に季語を入れると言う約束事があります。

夏草や兵どもが夢の跡

松尾芭蕉

この句は有名な芭蕉の『奥の細道』の中に出てくる一句ですが、ここでは「夏草」が夏

を表す季語になっています。この季語について、季語と季題を使い分けて使う人もいます。その場合の季語は季節を表す言葉全般をさしているのに対して、季題は俳句を作る時の「席題」や「兼題」などの題にする季語のことを言い、季語よりも重要視しています。題詠などで季語を題にするときは、その季語のことを季題として、季語という言葉とは使い分けられているのです。しかし、ここでは一般的に使われているように季題も季語も区別せず、一つにまとめて「季語」という言葉として使っていくようにしています。

俳句は十七音という短い表現になっていますので、感動を人に伝えるためには、どうしても一句の中に、普通の言葉とは次元の違う印象の強い言葉が求められます。俳句では、そのような働きをする言葉を季語として一句の中に取り入れて詩情を高めてきました。特別な場合は別として、季語が入っている「有季」が、俳句を作る時の伝統的な約束になっています。この季語も時代の流れとともに変わってきていますので、季語に対する受け止め方も様々であって、考え方もいろいろあります。中には、

しんしんと肺碧きまで海のとび 篠原鳳作

湾曲し火傷し爆心地のマラソン 金子兜太

戦争が廊下の奥に立ってゐた 渡辺白泉

いつせいに柱の燃ゆる都かな 三橋敏雄

広島や卵食ふ時口ひらく 西東三鬼

木の股の猫のむこうの空気かな 橋 間石

号泣やたくさん息を吸ってから 池田澄子

のような季語のない無季の俳句を作る人もいますが、その場合でも一句の中には季語に代わる詩的な象徴的な言葉が「詩語」として位置づいています。

歳時記を開いてみますと、現代俳句協会が中心になって編集した『現代俳句歳時記』に、季語のない無季の俳句を「雑」の部としてたくさん取り上げています。また『季題別飯田龍太全句集』では、季語のない俳句を「雑」として十九句別に取り上げている例もあります。同じようにこの大会の選者をしていただいていた有馬朗人先生も、全句集の中に「雑」として無季の俳句を六句残しています。この無季については、季語を入れることに非常にこだわっていた水原秋桜子も、晩年にはいくつかの無季の俳句を発表していますし、無季は認めないと主張していました藤田湘子も、死の直前の発表作品の中に「無季」という前書きのある「死ぬ朝は野にあかがねの鐘鳴らむ」と言う句を絶句として残しています。

季語のない俳句について東北大震災の惨事を俳句雑誌で特集しているものを見たことがあります。その時季定型を基本とする俳人が無季の俳句を発表していました。私は発表された俳句を見ながら、あのような惨事の中では、季語を越えた表現になることを改めて教えられとともに、無季の俳句も俳句として認められてもいいのだと思いました。

また、一方で「ラムネ瓶しゅわっと夏が始まった」の講評の中でも説明しましたが、季語の重なる「季重なり」も俳句では問題になることがあります。「季重なり」とは、一つ

の俳句に季語が二つ以上入っている俳句を言います。原則として一つの俳句に季語は一つで作ることが、俳句を作るときの暗黙の約束になっています。ただ一句の中に、仮に二つの季語が使われていたとしても、そのどちらかに明らかに焦点が絞られていれば、必ずしも俳句としてだめな作品と言うことはありません。しかし俳句の約束事に慣れるまでは、季重なりの句はできるだけ避けて一つに絞る方が、俳句としての乱れは少なくなると言われています。この「季重なり」については、

秋風や桐に動きて葛の霜 芭蕉

ほととぎす鳴くや五尺の菖草 芭蕉

菜の花や月は東に日は西に 蕪村

鶯や卒然として霞める日 虚子

障子しめて四方の紅葉を感じをり

星野立子

蚊の去りしあとあかつきの青葉木菟

秋桜子

桜よりはしまつてゐる初紅葉 稲畑汀子

稲刈りの進めば進む蝗かな 鷹羽狩行

など芭蕉や蕪村、高浜虚子、水原秋桜子などの句や歳時記の中にも「季重なり」の俳句をたくさん見かけますので、季語が重なっている俳句もあることは知っておいてください。しかし十七音という短い一句の中で、季語のように中心になる強い言葉が二つ三つと重なると、俳句の中心が割れてしまい、まとまりがなくなり美的ではなくなることもあります

ので、中心を一つに絞ることが求められるのです。(これについても河東碧梧桐たちの無中心俳句という運動もありましたので一概には言えませんが…)

したがって「季重なり」になっても一つの季語が強くて主になり、もう一つの季語が副になって支えているような場合は、俳句として立派に成り立ちますので、季重なりというだけで、その一句を否定することはできません。また「季重なり」の俳句の例としてよく出てくる山口素堂の

目には青葉山ほととぎす初鯉 山口素堂

の有名な句などは、三つも季語が重なっていますが、視覚としての「目には青葉」聴覚としての「山ほととぎす」味覚としての「初鯉」のように感覚で統一されていますので、「季重なり」が逆に有効に生かされています。

「切れ字」について

俳句では「切れ」が大切であり、「切れ」を作るために使われる「や」「かな」「けり」のことを「切れ字」と言います。俳句ではこの切れ字が特に大切だと言われています。切れ字を使った俳句としては、

古池や蛙飛びこむ水の音 松尾芭蕉

月天心貧しき町を通りけり 与謝蕪村

などが特に有名で、教科書の中にも紹介されています。「切れ」があると俳句が引き締まり、

余韻が出てきます。この「切れ」は、俳句独特の特性ですので、きちんと理解しておく必要があります。この俳句における「切れ」を見ていくと、今回の作品の中には「や、かな、けり」などの切れ字を使っている俳句として、

うとうととがんばる姉の夜学かな

啄木鳥や樹木の命を守る医者

などの句が見られます。一方「や、かな、けり」というような切れ字は使っていないのですが、切れを使っている俳句として、

「春の池」弾む水音ばびぶべ

「こいのぼり」世界の平和見つめてる

「ラムネ瓶」しゅわっと夏が始まった

「サングラス」めがねの形で日やけた

「夏休み」平和の鐘が鳴り響く

などの作品があります。

俳句の「切れ」は、文字通り内容を切り分けたら、余韻を持たせたりする働きがあります。俳句は最短短詩ですから、十七音を途中で切って内容を分け、余韻を持たせることで詩的な世界に膨らみを生み出します。切れ字の役目は、その前の語句の意味を強調したり、俳句を詠むときにそこで一瞬息をついたりして、その語の持つ意味や印象をより鮮明に印象深くするなどの働きがあります。五七五を切れのない言葉で表現してしまうと、一句がやや締まりのない感じになってしまうことが

あります。「や」「かな」「けり」などの終助詞に限らず活用語の終止形や命令形など、また名詞なども一旦そこで切れる場合は広い意味では切れ字と言います。

冬の水一枝の影も欺かず

中村草田男

の句も「冬の水」で一旦切れていますので、それは切れ字と言うことができます。また十七音を途中で切ることによって、その直前の言葉を強調したり、アクセントをつけたり、感動したポイントを詠嘆したりして、読む人に分かりやすく伝えてくれます。読む人が「や」「かな」「けり」で詠嘆されると、俳句らしく感じるのもそのような働きがあるからです。

例えば「目の前に真つ赤な花が咲いている。空は雲一つなく晴れ渡っている。」と書かれると眼前に真つ赤な花が残されたまま雲一つなく晴れわたった空に映像が映っていき、直前の花の色が強調され儼に残ります。この例文のような働きが俳句の「切れ」にはあるのです。

さらにもう一つ、一句の中の「切れ」は一つだけという暗黙の了解があります。一つの俳句に二つの切れが入ってしまうと、その俳句は「三段切れ」と呼ばれ、俳句における「切れ」の効果を失ってしまい、逆に一句がばらばらになり単語の羅列のようになってしまいます。もちろんこのことも俳句の決まりとして「絶対にダメだ」と言うことではありませんが、「切れ字」を使って俳句をぶつぷつ切ってしまうと、美的な世界が壊されて粗雑になり、短い俳句がばらばらになって、まと

まりがなく味わいが浅くなるので、できるだけ避けるようにしています。しかし水原秋桜子は、最後の辞世の句として「紫陽花や水辺の夕餉早きかな」という「や」と「かな」の重なった句を作っていますし、中村草田男は「降る雪や明治は遠くなりけり」というように「や」と「けり」の重なった句を作っています。このように「切れ字」を二つ使っているのも、これが有効に働く場合は作品として立派に自立するということです。水原秋桜子の一門であった石田波郷の

機織や田は植ゑられて了ひけり

鮎打つや天城に近くなりけり

茶を買ふや麻布も暑くなりけり

のような「切れ字」が二つ重なった句があることはよく知られています。ここで俳句の切れの働きをまとめてみると、「余韻をもたせて表現を大きくする」「感動のポイントを分かり易くする」と言うことです。ちなみにこれまで大会の選で「や、かな、けり」など切れ字が二つ重なっている作品は、見当たりませんでしたので、入選作品の中には入っていません。

俳句の構成について

五七五の十七音がどのような組み立てになっているか、つまり俳句の基本的な構成を考えることがとても重要になります。

俳句では、「五七五」の作品を一つのまとまりとして述べる方法を「一句一章の句」と

か一物（いちぶつ）仕立ての句」とか言います。その例としては、

流れゆく大根の葉の早きかな 高浜虚子

飴して山ほととぎすほしいまま 杉田久女

滝落ちて群青世界とどろけり 水原秋桜子

一月の川一月の谷の中 飯田龍太

再軍備絶対反対胸まで焚火 柏原和男

野に来れば野にはとんぼの眼満つ

田原千暉

雛壇に置き忘れたる貝鉤

鈴山 實

草餅を焼く天平の色に焼く

有馬朗人

蛇下げて来し子に弥撒の座のくづれ

宮田カイ子

まっすぐに雪の束来る鯉の村 松田ひろむ

山一つ超せば余寒のピアノ鳴る 秋篠光広

雑煮食うも骨を拾うも箸の国 河野輝明

ミャンマーの子もベトナムの子も聖夜

伊藤淳子

分校の児童の数のチューリップ 田島恵子

じゃんけんで負けた蛍がついて来る

赤嶺友子

村中の夕日集めて稲を刈る

足立町子

少年の手話にからまる花の雨

牧野桂一

などの俳句があります。今大会の作品では、

どんぐりをたくさんとってかわいがる

平井悠聖

うとうとがんばる姉の夜学かな

佐伯柚葉

美しい君のまつげに積もる雪

穴井美榮

玄関で母につかまるカブトムシ 奥津太郎

公園の落ち葉をけって逆上がり 関川來珠

などが一句一章の句となります。つまり「全体が季語に関係すること」でまとまっています。

また、五七五が句の中で切れているのを「二句一章の句」とか「取り合わせの句」とか言いますが、その例として、

春風や闘志いだきて丘に立つ 高浜虚子
冬菊のまとふはおのがひかりのみ

水原秋桜子

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏

女来と帯び纏き出づる百日紅

石田波郷

萱さむし日本国立療養所

田原千暉

夕焼けやパンとは立ちて食うものか

柏原和男

啄木忌春田へ灯す君らの寮

古沢太穂

白梅や仏を入る、経の声

飴山 實

祇園会や千の乙女に千の櫛

有馬朗人

名月やはばたくものを籠の中

秋篠光広

背にシャワーそこは昨日の羽根の後

伊藤利恵

一月や捨つべきものは早や捨てて

倉田紘文

夏休み時刻が緩む壁時計

栗木康恵

吾亦紅揺れたいときに風が無い

足立 攝

秋の日や調律音はラのひびき

園田真理子

エプロンの袖口に風大根干す

大野洋子

神無月墨汁描くシヨパンの音

吉田由紀

などの俳句があります。今大会の作品では、

春の池弾む水音ばびふべば

佐藤愛香

啄木鳥や樹木の命を守る医者

吳 祐安

いわし雲ホウキで散らす反抗期

山田 凜

夏休み平和の鐘が鳴り響く

白濱颯琉

などが二句一章の作品となります。つまり『季語』+『季語に関係の無いこと』や『季語に関係の無いこと』+『季語』と言うことです。したがって俳句を鑑賞するにあたっては、私たちは知らず知らずのうちに、胸に伝わってくる感動がどのような構造になっているかを自然に感じているようです。俳句を作ったり推敲したりするときに、このことを頭に入れておくと俳句の世界が広がってくると思えます。インターネットでも同じようなことがコスモスを例にして紹介されていました。「コ

スモス」は四音なので、上の五音にするために何か一音足す必要があります。つまり「コスモスの」「コスモスを」「コスモスに」などと考えていくのですが、その中で一句一章になっているものを少し紹介します。

コスモスはどこにありても風少し

細見綾子

コスモスもすがれる蝶も露しとど

水原秋桜子

またこのコスモスで、二句一章の句にするために「コスモス」に切れ字の「や」をつけて「コスモスや」としています。「や」は切れ字の働きをして強い詠嘆を表します。美しいなあ。もうこんなにたくさんコスモスが咲いているよ」とか「わあ、可愛らしい。こんな所にコスモスが咲いているよ」と言うような状況を表現してくれます。それらの作品には、

コスモスや二戸相倚れる柿葺 阿波野青畝

コスモスや倒れぬはなき花盛り 松本たかし

コスモスや光かがやく墓ばかり 村山古郷

コスモスや墓銘に彫りし愛の文字

富安風生

などがあり、インターネットでは、「コスモスやもうすぐ妻の誕生日」という句が紹介されていました。

類句、類想句、模倣句について

今回の選句において入賞・入選の作品に採用しなかったものに、類句、類想句、模倣句という問題があります。「類句、類想句、模倣句」は、同じような発想で同じような俳句を作ることです。俳句は十七音しかない短い表現ですので、似たような俳句や全く同じ俳句が生まれやすい傾向があります。そのために、様々な大会においても類句、類想句、模倣句を検証し、吟味して入賞を決めています。本大会の選句にあたっては、基本的には類句、類想句は入賞・入選句から外しています。

類句、類想句、模倣句を調べるために、本大会の過去の作品を検証しました。また全国的な大会での入賞作品に対しては、連携している各種俳句大会の事務局に候補作品を送り、詳しく検証していただきました。そして類句・類想性や模倣性が強く感じられる作品については、選から外しました。このような類想句や模倣句については、十七音と言う短さの特徴とする俳句の持つ宿命のようなもので、似たような俳句や全く同じ俳句が生まれるのは常と言っていいくらいです。そのため、大きな俳句大会などにおいても、過去に他の大会で入賞した句が、別の俳句大会で受賞したりして問題になることもあります。そのような場合には「受賞を取り消す」ことになっているようです。

しかし俳句を作るときに、類句、類想句を恐れて、俳句をのびのび作ることが出来なくなってしまうと困りますので、「自分から進んで意識的に真似をする」ことは避けるとしても、結果として類句、類想句になること

は、必要以上に気にしないで良いと思います。芭蕉も「自分の句が他人の句に似てしまうより、実は自分が似たような句ばかり作っていることに気付かないものです。これを避けるには深く考えて、味わいながら句を作ることです。もし類句を作ってしまったら、迷わず自分の句を捨てなさい」と言っています。そして芭蕉自身も「須磨は暮れ明石の方はあかあかと日はつれなくも秋風ぞふく」という歌と関わって「あかあかと日はつれなくも秋の風 芭蕉」という俳句を作っています。また、別の例に

降る雪や明治は遠くなりけり 中村草田男

と言う句に先駆けて、

瀬祭忌明治は遠くなりけり 志賀芥子

と言う俳句がすでにあったことなど、有名な話もあります。他にも「良寛と一茶」に、

焚くほどは風がもてくる落ち葉かな 良寛

焚くほどは風がくれたる落ち葉かな 一茶

「池西言水と山口誓子」に、

木枯らしの果はありけり海の音 池西言水
海に出て木枯らし帰るところなし 山口誓子

「川端茅舎と多賀よし子」に、

一枚の餅のごとくに雪残る 川端茅舎

一枚の餅の如くに乱れたく 多賀よし子

「森澄雄と鈴木真砂女」に、

籬簾（めなもみ）や旅につかれしふくらはぎ 森 澄雄

初蛙旅の疲れのふくらはぎ 鈴木真砂女

「森澄雄と日美清史」に、

かたかごの花や越後にひとり客 森 澄雄

かたくりの花や常陸にひとり客 日美清史

「池田澄子と權未知子、奥坂まや」に、

新鮮に死んでいるなり桜鯛 池田澄子

いきいきと死んでゐるなり水中花 權未知子

いきいきと死んでゐるなり兜虫 奥坂まや

などと上げていけば枚挙にいとまがありません。今回も既に他の大会で賞に入っている作品や俳句の書籍の中に掲載されている作品がありました。考え方によれば、その作品は誰が見ても優れていると言うことなのですが、本大会においては、先に発表した作品を優先すると言うことで、すでに発表された作品がある場合は、入賞・入選作品から外すことに

しました。他にも全く同じではありませんが、とてもよく似ている俳句についても、先に作った人の作品を優先すると言うことで、入賞・入選から外しています。

俳句における推敲について

俳句を作っていく時、もう一つ大切なことがあります。それは「推敲」です。推敲とは、出来上がった俳句を、質を高めるためにもう一度見直して、一句に表現した字句を吟味して練り直すことです。ここで特に大切になることは、最初に読み直すことです。俳句でするので声に出して、できれば朗々と読み直すことがとても重要になります。芭蕉はそのことを、去来抄の中で「舌頭に千転せよ」と言っていて、「何度も何度も舌の上に乗せて読み返すこと」を勧めています。俳句では、リズムや調子が特に大切ですので、読み返しているうちにより良いリズムのある表現を獲得できるのです。

またこの読み返しは、誤字脱字、言葉遣いの間違いを見つけることにもつながります。さらにこの読み返しの中で、同じ音の繰り返しや韻の踏み方、あるいはオノマトペの響きはどうかなどについても考えていくことができ、俳句としてより深い表現ができるようになります。

次に、この出来上がった俳句を客観的に読み直すことも必要になります。その時、自分の表現しなかったことが素直に書けているかどうかや、人が読んで真意が伝わる表現になっているかを吟味していくことが必要になります。このためには、作った俳句を一日お

いて推敲する人もいます。

一方、季語や言葉、語彙のチェックをしていくことも完成した作品に仕上げるためには、とても大切になります。季語の使い方は、特に重要ですので、有効に働いているかどうかや、別の季語に置き換えをした方が良いかどうかなどを丁寧に検討する必要があると思います。言葉や語彙については、重複はないか、言い間違いはないかなどについて辞典を活用しながら検討し、間違いがあれば訂正し、重複表現があれば削るようにし、同じような表現があれば吟味し省略するようにします。

次に、言葉の語順は現状のままが良いかを考え、しっくりいかなければ語順の入れ替えを試みます。常套的な句や手垢の付いたような通俗的な語句がないかを見直し、あれば新鮮なその場に合った具体的な表現に変えていきます。加えて、漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字・数字・外国語などの表記が効果的かどうかを検討し、適切な表現に直します。助詞の使い方も俳句では独特な使い方をすることもありますが、ここでの使い方が適切かどうかを検討し、その場面に合ったものに置き換えていくようにします。

最後にこの作品に「類句、類想句、模倣句」があるかどうかを検討する必要があります。もし意図的に真似た部分があれば、その作品を公表することは差し控えるようにして下さい。

俳句における分かり易さ

俳句はやはり文学・文芸ですから、人に伝えると言う大切な機能があります。このこと

から考えると「分かり易い」ことは、とても大切な要素ですが、分かり易いだけでは人を感動させるいい作品にはならないという問題もあります。芭蕉以来、多くの先人の優れた作品を読んでみますと、確かに分かり易い俳句が多くありますが、理解することが難しい俳句も結構たくさんあります。読み手としては、分かり易い俳句に親しみを感ずますが、だからと言って分かり易い俳句だけがいい俳句であると決めつけることは、少し早合点のような気がします。一見難しいと思われる俳句も、難しい言葉を辞書で引いて確かめたり、分からない所を人に聞いたりしながら、ゆっくりと丁寧に読んでいくと、その俳句の良さや魅力に出会うことができます。実はそこに俳句のもう一つの価値があるのです。そのように考えると俳句は自分の作品を作ることと、人の作品を鑑賞することを同時に行うことがとても大切になるのです。芭蕉は「自分は句を作ることには一番ではないかも知れないが、俳句をさばく（選句をして鑑賞する）ことでは人に負けない」と言っています。皆さんもこのように自分で俳句を作るとともに、この機会に是非、多くの人の作品を読んで味わう楽しさを学んでもらいたいと思います。

俳句は昔から「衆の文学」と言われるように、仲間の作った作品を読み合ってその作品の分からないことや良いと思ったことなどを仲間同士で話し合っ意見交換することも伝統的に大切にしてきました。そのようなコミュニケーションが俳句の中ではとても大切なのです。

俳句の言葉を増やすために

私はこの大会が始まった頃から二十年近く、地域の公民館の子ども俳句教室で小学生と一緒に俳句を作っていました。その教室には、この大会の選者で、私の俳句の先生であった有馬朗人先生も大分に何回か来て、直接子ども俳句の指導をして頂いたこともありました。その時小学三年生の女の子が有馬先生に「よい俳句を作れるようになるには、どんな勉強をしたら良いですか」と質問をしたのです。その時、有馬朗人先生は「毎日、国語辞典を一ページずつ読むことがいい」と教えてくれました。国語辞典を一冊全部読めば、私たちの生活に必要な言葉は、ほとんど学ぶことができるからです。

早速全員で『子ども歳時記』とともに『国語辞典』を読む勉強を始め、全員が季語だけでなくたくさん言葉を知り、それを俳句の中でも使えるようになったので、見違えるようにレベルの高い俳句が作れるようになりました。そしてそれは、俳句だけではなく他の教科の勉強にも広がって、担任の先生をびっくりさせたのです。それ以後、私は子ども俳句会で縁のできた仲間には、必ず小学生用の『国語辞典』をプレゼントすることにしていきます。

俳句の勉強の仕方について

俳句を学ぶ最もよい方法は、句会に参加することです。この句会とは、分かり易く言えば俳句の勉強会のことです。それぞれのグループによっていろいろなやり方があります。

す。ここでは、私が公民館の子ども句会でやっている方法を紹介します。

句会と言っても、小さな少人数のグループで楽しむ句会から、学校など数十人集まってしまう句会まで様々あります。私たちの公民館子ども句会では、二十人くらいで行っています。句会にあたっては、まずあらかじめ句会に投句する俳句の数（出句数）を決めておきます。参加する人は、句会に参加する前に決められた数の俳句を作って用意しておきます。（先日行った玖珠町の小学校の句会では、句会の前に学校の周りを散策して句会に出す作品を作りました）句会に参加するために、自分の作った作品を持って出掛け、会場では俳句を書く「短冊（細長い紙）」が配られますので、あらかじめ作っておいた俳句を短冊に書いて提出します。この時自分の名前は書けません。句会の世話をしてくれる人が、集めた短冊をばらばらにして参加者に分け、その短冊とともに清記する用紙を配り、参加者に清記してもらいます。この時、間違えないように丁寧に楷書で書き写します。全部書き終えたら、その清記用紙に「一」「二」「三」と番号をつけていきます。

次に選句をします。清記用紙を右の座席へと回していきながら、回ってきた清記用紙の句の中から、良いと思った句を選んで自分のノートなどに書き写します。そしてすべての句を見終わったら、決められた数の句をさらに選んで、選句用紙に清書します。この時、用紙の右端に「牧野桂一選」と言うように、誰が選んだかが分かるように自分の名前を書いておきます。なお、この選句にあたっては、自分の作った俳句は、自分では選ばないよう

にします。そして、全員の選句用紙を集めて、いよいよ俳句の披露が始まります。

披露では、それぞれの人が選句した句を句会の世話人が読み上げていきます。俳句の披露ですから、歌うように声高らかに吟ずることが求められます。この時、自分の俳句が読み上げられたら、「桂一」と大きな声ではっきりと名乗りを上げます。私たちが大分で行った句会でも有馬朗人先生は、この名のりの時「朗人」ととても大きなはっきりとした声で名乗りを上げていました。

披露が終わったら合評です。合評ではそれぞれの作品について、その作品の良かったところや問題になるところなどについて自由に意見を出し合っていきます。合評の最後には、その句会の世話人や指導者が、総括的な批評をしていきます。子ども俳句会では、選に入らなかった句も含めて全部の句について批評することが勉強になると思います。

吟行について

吟行とは、俳句を作るために実際の景色を見て、季語と出会うために外へ散策に出て行くことを言います。俳句を作りながら（吟じながら）歩くことで「吟行」と言うのです。この吟行は俳句を作る人たちにとっては、とても大切なものです。

俳句では俳句を作るために、郊外や名所など景色のよい所や旧跡などに出かけて行くことを言っていますが、最近では、外国にまで出かけて行くような大がかりなものもあります。先輩や仲間と一緒に出かけ、同じものを見て俳句を作るので大変勉強になります。自

然に触れて、そこにあるものを通して俳句を作るので、草や鳥や虫などの季語を覚えることもでき、とても有意義なものです。

俳句における選句について

俳句の特徴として選句があります。つまり自分で俳句を作るだけでなく、人の作った俳句の良し悪しを選別して、良い句を選ぶわけです。そこでは「どういう俳句が良い俳句なのか」ということを考えて自分で選ばなくてはなりません。慣れない時にはとても戸惑ってしまいます。この選句の場で「どの俳句が良くて、どの俳句が悪いのか」を考えていく場合大切なことは、自分が好きかどうかです。つまりその作品を読んだ時に、すつと心に入ってくるもの、単純に「この俳句には引きつけられ、自分は好き」と思う俳句が一番良い句と考えるのです。このように言うとき、「本当にそれでいいのか」と少し不安になるかも知れませんが、俳句を読んだ新鮮な自分の感覚が大切なのです。何の雑念もなく、まっさらな心で選ぶことができるのは、読んだ自分の新鮮な気持ちしかありません。だからどこまでも自分の感性、価値観を信じて選ぶのが一番いいのです。

良い句を探す時は、自分が良いと感じる句を探すのが第一であって、他人が良いと感じる句を探すのではないと言うことです。人は他人とは違う感じ方をするのが当たり前です。この違いが、俳句でも他の芸術でも大切なことです。これは、俳句を作る時と全く同じことです。人の意見に同調ばかりしていると、人とは違う感じ方をするのが出来なくなり

ます。「人とは違う感じ方をする」「自分らしい感じ方をする」ことが、文学である俳句の最も大切な要素で、それが俳句を作る原動力になり、俳句を作る喜びにもなります。

高浜虚子は「選は創造なり」と周りの人たちに教えていました。つまり俳句では、人の作品の選をすることは、自分の作品を創ることと同じように大切であることを教えてくれているのです。

ここで今回の大会の入選作品の選句について説明を付け加えれば、私たち選者は、特別な俳句の指導をする立場にはありませんので、皆さんの作品を添削することはしておりません。一般の句会で選をするのと同じように、私たち選者の良いと思った作品を選んでいきます。したがって、誤字脱字や表記に明らかな間違いのあるもの、内容を読み取ることができないものは、いくら内容がよいように見えても入賞・入選句の中には入っておりません。

子ども俳句指導者へお願い

最後に俳句の学び方について、野見山朱鳥がある著書の中で面白いことを教えてくれていますので紹介したいと思います。

俳句雑誌「ホトトギス」の黄金時代を作った俳人に村上鬼城という人がいました。その鬼城は句会の指導で、選に漏れた作品を取り上げ、その欠点について詳細に解説したそうので、その指導の仕方が的確で分かり易く、皆を納得させるものであったため、とても人気が高く鬼城に俳句の教えを乞う人がたくさん出てきたと言います。

一方、俳句雑誌「ホトトギス」の主宰者である高浜虚子は、入選した作品の良いところを指摘して誉めるだけであつたと言います。この二人の指導の結果として、高浜虚子の弟子からは、次々と俳壇をリードするような優秀な俳人が出てきましたが、村上鬼城の門下からは、虚子の門下ほどには、俳壇をリードするような俳人は生まれなかったのです。

人は、自分の欠点は案外自覚しているのですが、長所はなかなか見え難いと言うことでしょう。指導する方としても、俳句の欠点を探すのは割に簡単にできるのですが、逆に良い所、優れている所を見つけることは、難しいと言いかも知れません。ちなみに有馬朗人先生は、子どもの指導の中で欠点を言ったり、添削したりすることはほとんどなく、一つ一つの作品の良い所を取り上げて丁寧に教えて下さいました。これからも子ども俳句会などで児童生徒の俳句の指導にあたり、皆さんが中心になって句会をしたりして、俳句を教える機会がある時は、このことも俳句の特性であることを覚えておいていただけたら有り難いと思います。



特選句

日本童話祭（久留島武彦顕彰）
第四十二回全国児童生徒俳句大会

満開のコスモス畑

小 学 校

大分県	先生の白髪が増える秋の空	大分市立 大在小学校	6年	太田美結
大分県	毛糸編む母の手元に折れた針	大分市立 大在小学校	6年	宮崎胡翠
大分県	くものすの空中ぶらんこさかさづり	大分市立 坂ノ市小学校	3年	日野桃子
大分県	うろこぐもキュツと曲がったスライダー	中津市立 沖代小学校	3年	中田朝陽
大分県	遠足でみんなで見たよ石仏を	臼杵市立 臼杵南小学校	3年	安藤夢釣
茨城県	いねかりや田んぼ一面きらきらと	稲敷市立 あずま西小学校	3年	宮本葵白
茨城県	ランドセルおろしいつきにのむ麦茶	常総市立 玉小学校	3年	大野葵
群馬県	赤とんぼ夕日といっしょに帰ってく	高崎市立 城東小学校	4年	加藤美希
埼玉県	寝袋に包まれ響く虫の声	川口市立 元郷南小学校	6年	佐藤こはる
東京都	星月夜スタッカートの練習中	国立東京学芸大学附属 竹早小学校	6年	上野咲
東京都	秋の風ふしぎな子ねこいなくなる	江戸川区立 南篠崎小学校	4年	五十嵐大翔
東京都	たけとんぼたかくとんだよひつじぐも	江戸川区立 南篠崎小学校	4年	銭愷恩
東京都	いずる日が富士に輝く初もうで	江戸川区立 南篠崎小学校	5年	荒木琢磨

東京都	どんぐりを集めて拾う宝物	武蔵村山市立小中一貫校 大南学園第七小学校	4年	原野葵
神奈川県	涼しげにはにわの男子クワを持つ	横浜市立 元石川小学校	4年	荒川麻梨子
富山県	あきまつりのおししほんばんふえをふく	高岡市立 伏木小学校	2年	高井春妃
富山県	秋祭りふえのけいこのつづく夜	高岡市立 伏木小学校	3年	竹本結咲
富山県	後ろから赤いとんぼの羽つまむ	高岡市立 伏木小学校	3年	村田惇
富山県	寒い夏きりにかくれる黒部ダム	高岡市立 伏木小学校	4年	前原琉風
富山県	新しい水着を選ぶし着室	高岡市立 伏木小学校	4年	大野小花
富山県	初めてのサーカス夏の大テント	高岡市立 伏木小学校	5年	角村昂瑠
鳥取県	スイカわり兄をだました左右	鳥取市立 美保小学校	3年	西田芽生
徳島県	つばめの子みんなソプラノ歌ってる	徳島文理小学校	5年	中村健汰
徳島県	暴力の連なる世界春を待つ	美馬市立 江原南小学校	6年	坂本孝仁
福岡県	おばあちゃんいっしょにねたね夏休み	嘉麻市立 嘉穂小学校	2年	篠原陽菜
台湾	鯉のぼり空で遊んでいる竜だ	崇華小学校	3年	陳彦哲

中 学 校

大分県	静電気バチツとひかる指と指	大分市立 滝尾中学校	3年	山田茅奈
大分県	おにごっこおにになれない雀の子	大分市立 滝尾中学校	3年	大田華蓮
大分県	青空に近づく僕のシャボン玉	大分市立 滝尾中学校	3年	柴田鉄生
大分県	暗がりの浴室響く除夜の鐘	大分市立 滝尾中学校	3年	北村朝日
大分県	祖母とみた最後の夏の青い海	大分市立 大在中学校	3年	首藤瑞希
大分県	いきものの気配が消えて山眠る	大分市立 大在中学校	3年	熊井絵蓮
大分県	麦茶注ぐ氷からんと崩れけり	大分市立 大在中学校	3年	高橋航輝
大分県	灯籠や平和を願い流しけり	佐伯市立 米水津中学校	3年	渡辺蒼佑
大分県	指揮者だけ見つめた演奏夏休み	臼杵市立 東中学校	3年	江藤未来
大分県	天の川十人十色願い星	九重町立 ここのえ緑陽中学校	1年	佐藤天音
大分県	冬来たる山の頂きオリオン座	九重町立 ここのえ緑陽中学校	3年	安部陽翔
宮城県	原爆忌あの日をずっと忘れない	岩沼市立 岩沼中学校	1年	渡辺瑠依
宮城県	針供養見よう見まねで折れた針	岩沼市立 岩沼中学校	1年	本郷真望

宮城県 いやなこと消えてすつきり流し雛

東京都 ハイキング雲と重なる富士の山

静岡県 夕暮れに忘れた浮き輪波の音

静岡県 麦茶飲むペットボトルは逆さ立ち

福岡県 雨うけてハクモクレンは空を向く

福岡県 窓に触れ凍る指先冬の雨

福岡県 立冬に響く夜空の笛の音

福岡県 病室の窓まで届く虫の声

福岡県 壱岐島や心も透ける夏の海

福岡県 雲のない空いっぱい渡り鳥

福岡県 新人戦柔道優勝秋高し

高等学校

大分県 いつもより夕日が赤いのは君のせい

大分県 指先のかじかむ君に手を重ね

岩沼市立 岩沼中学校 1年 加藤 舞友叶

品川区立 伊藤学園 9年 星野 泰 駕

裾野市立 須山中学校 2年 川 勝 蒼 大

裾野市立 須山中学校 3年 横 山 悠 真

筑紫野市立 筑山中学校 2年 赤 坂 未 來

筑紫野市立 筑山中学校 2年 佐 藤 茉 紘

筑紫野市立 筑山中学校 2年 鳥 羽 周

古賀市立 古賀東中学校 1年 中 村 百 助

古賀市立 古賀東中学校 1年 北 野 景 愛

古賀市立 古賀東中学校 1年 盛 川 文 翔

古賀市立 古賀東中学校 1年 松 崎 慶 人

日本文理大学 附属高等学校 3年 品 矢 奈 那

楊志館高等学校 3年 外 山 彩 純

埼玉県	句読点ばかりの嘘や雪蛩
岐阜県	原野ゆく寝台列車冬銀河
岐阜県	長き夜のぱさと新刊めくる音
岐阜県	泥水の大波小波蝌蚪の群れ
岐阜県	本堂の床軋む音山眠る
兵庫県	赤とんぼ夕焼け小焼けさようなら
鳥取県	台風がひとりの夜にノックする
山口県	伯父からの懷中時計冬の星
徳島県	夕立ちやひとつの傘をはんぶんこ
徳島県	抜け落ちた乳歯を屋根に舂うらら
徳島県	補習の灯消えた教室秋北斗
徳島県	水澄んで蒼く流れる朝の川
徳島県	あの人に会いたい真っ赤な彼岸花
徳島県	麦畑乾いた風が波を成す

星野高等学校	1年	嶋	原	音羽
鶯谷高等学校	1年	加	藤	佑理
鶯谷高等学校	2年	松	口	遙陽
鶯谷高等学校	3年	安	居	瑞海
鶯谷高等学校	3年	小	川	桃奈
神戸市立 神港橘高等学校	3年	堀	江	ささら
湯梨浜学園 高等学校	1年	岡	田	明子
山口県立 下松工業高等学校	1年	松	原	征春
徳島県立 脇町高等学校	3年	鎮	山	小春
徳島県立 脇町高等学校	3年	前	田	妃織
徳島県立 脇町高等学校	3年	吉	田	百花
徳島県立 脇町高等学校	3年	河	埜	綾音
徳島県立 脇町高等学校	3年	丹	田	菜穂
徳島県立 脇町高等学校	3年	佐	藤	正理



旧豊後森機関庫と満天の星空

小学校

〈大分県〉

玖珠町立森中央小学校

かぶとむしくわがたよりもつよくなる
なつやすみぼくがうったよホームラン
さくらさくかぞくみんなでピクニック
クリスマスサンタの鈴が聞こえるよ
雪だるま中には誰が入ってる

玖珠町立塚脇小学校

なつやすみラウンドワンでボーリング
なつかげとじゃんけんぼんであいこだよ
なつやすみらつことあったしものせき
すなはまでトンネルつくった夏休み
運動会今鳴り響くファンファーレ
いつまでもみんな大好きクリスマス
冬風や夕日飲み込む西の海

玖珠町立小田小学校

はりの中すくすく育つあまいくり
ドンコとりみんなでわいわい夏休み
雪が降る羽のようにふわふわと

玖珠町立北山田小学校

ハロウィンこわいかそうでおどろかす
秋の道夕日が背中を追っている
夏の空打ったボールはスタンドへ

玖珠町立八幡小学校

かき氷ブルーハワイが美味しいな

玖珠町立古後小学校

家の庭マフラーまいて雪遊び

玖珠町立くす若草小中学校

まつぼっくり十人十色個性だね

日田市立桂林小学校

風景画ひまわりの向き太陽へ

日田市立日隈小学校

ゆうやけににゅうどうぐものかきごおり

大分市立城南小学校

空高く白鳥のむれとんでいく

大分市立明野西小学校

ちりりりんガラスにぶつか風りんさん

大分市立明治小学校

ひまわりの笑顔にほくも負けないぞ

大分市立大在小学校

秋の夜風がふいたら色がまう

大分市立大在小学校

風鈴が風とおどるよりンリンと

大分市立大在小学校

運動会笑顔とバトンつなぐとき

大分市立大在小学校

紅葉までごうかに染まる金閣寺

大分市立大在小学校

稲光激しい雨とやってくる

大分市立大在小学校

ふと見れば風に揺られる初日の出

大分市立大在小学校

虫が出た温泉まつりあせが出た

大分市立大在小学校

干した稲見れば見るほど秋の色

6年 河津 智樹

4年 小森 悠輝

6年 徳丸 蒼

1年 諫山 絢音

2年 首藤 陽香

2年 山村 渚

5年 森田 朝陽

5年 坂本 結愛

5年 松本 和香那

6年 松本 未緒

6年 梅木 琉莉

6年 阿南 匡邦

6年 宮崎 莉紗

6年 佐藤 有悟

6年 相原 煌太

佐伯市立佐伯小学校

七夕で会ってほしいなあ
の二人
カブトムシかいたいいっしょにくらしたい
新米がふつくらたけていいにおい
炎天下かげがどんどん逃げていく
秋が来た紅葉を見れば笑顔咲く
雨の中咲き続けるよ七変化

臼杵市立臼杵南小学校

あまかったさくらまつりのいちごあめ
なのはながじゅうたんみたいにかいて
赤トンボ夕日の色にまぎれこむ
教室にひびきわたるよセミの声
かたつむりしばらくたつてもまだそこに

竹田市立祖峰小学校

いえのまえ大きくならぶゆきだるま
夏空に入道雲が背伸びする

竹田市立城原小学校

七夕のたんざく山ほどかなうかな
うれしいなラッコになれた初プル
稲刈りで大変そうなおばあちゃん

由布市立阿南小学校

水泳で宿題全部わすれちゃう

由布市立東庄内小学校

たけのこがよきによきによきと顔を出す
みつけたよかわいいつばみふきのとう

由布市立西庄内小学校

くちなしのおいの中をさかのぼる

昼さがり一人の田植えさみしいな
冬の空ベテルギウスの光る夜

〈北海道〉

小樽市立山の手小学校

プールすきゴーグルつけておよぎたい
サンタさんいまごろなにをしているの
おかのうゆれるすすきに人のかけ
いわし雲見てたらたまに眠くなる
ふる雪にはしゃぐぼくらの手はまつか
雪合戦やきいも食べたらずらうかな
木枯らしや登校の道いそぎ行く
あつ見えた願いが叶う流れ星
帰り道空全体にいわし雲
ぶな林葉ごとに結び光るつゆ

旭川市立大有小学校

ひやけするおみずあそびでたのしいな

〈宮城県〉

聖トミニコ学院小学校

そばの実をつるす軒先善光寺

〈茨城県〉

稲敷市立あすま西小学校

やきいものゆげがほかほかもう一こ
わたの実がたくさんはじてふわふわと
かき落ちてぼくのシュートは七本目
真っ赤だな細い花びらひがん花

〈群馬県〉

高崎市立城東小学校

パパよりも大きく作る雪だるま
おもしろい会話ではずむ白い息
しょうぶ湯でパパと勝負だ指ずもう
天の川はしごみたいのにのぼれそう
秋の朝トロンボーンで響かせる

〈埼玉県〉

川越市立名細小学校

ライオンがわたしを見てる夏休み

川口市立元郷南小学校

今日もまた冷やしそうめん食べる昼
盆踊り屋台にいつてタコライス
夏海飛びかう声と白い雲
日の下で黒い地面に汗垂らす
旅先の部屋から見える夏の川
かきごおりふわっと甘く冷えていく
何日も晴天続く大暑かな
暑そうだ黒いケースのタブレット

〈東京都〉

葛飾区立柴原小学校

ふうりんがカランカランとなっている
七色のにじがかなでるハーモニー
バレンタインもらえなかったチョココレート
金町線ゆうやけ空に人をのせ
帰り道すずむしいっぱきないている

江戸川区立南篠崎小学校

でっかいぞつちをもぐもぐおいもほり
秋の朝えんぴつちいさくなってきた
おままごとどんぐりつかっておしよくじ会
不知火を家族といっしょに見たい夜
夏のある星がゆつくり歩いている

武蔵村山市立小中一貫校大南学園第七小学校

あさがおがとでもおおきくさいていた
さむい雨ママはしごとにいきましました
夏の海会ってみたいなウミガメに
あおばがねささやきながらうたってる
かたつむりつんとさわるとおじぎする
秋の空とんぼが指に止まったよ
夏休み感想文はあとまわし
ヒガンバナもえてる赤いほのおだよ
どんぐりがあたまたにボツンとあたったよ
赤とんぼ夕やけ空を飛んでいる
夜の宝まどをのぞけば星月夜
祝日の朝はこたつに一直線
森の中ぴよこつとシカがのぞいてる
学校の帰り道には鰯雲
冬の空犬とオリオン三角形

〈神奈川県〉

横浜市立元石川小学校

キトラ古墳ドームみたいな夏の雲

〈富山県〉

高岡市立伏木小学校

バドミントンあきのくもまではねとばす 1年 満田 禅大
たねいっぱいあさがおたくさんさきました 1年 岡田 幸大
お月さまみないなまるいめだまやき 1年 古市 一桜
あきばれのお出かけくまにえさをやる 2年 濱谷 依千華
とんでくるよるのあかりにかぶとむし 2年 橋本 壮太
山小やのねぶくろみんなどねむってる 2年 吉川 澄虹
木曜日かぞくそろってはかまいり 2年 ヤオ 美樹
ひろしまへしんかんせんでいった夏 2年 渡辺 栞帆
ザリガニをとった九月のじいちゃんち 2年 橋本 朔空
水鉄ぼうたくさんとぼしてぬらしっこ 4年 引田 裕太
ばあちゃんとゆつくり散歩夏の空 4年 高井 勇貴人
風りんに願いをこめる宝徳寺 5年 高有 健伸
一時間かけた遠泳そうかい感 5年 中村 優希
夏はじめかがみの顔はもう黒い 5年 谷口 愛心
前日のうき輪パンパン早くねる 6年 村上 佑樹

〈愛知県〉

学校法人江西国際学園

ちようが舞う青い舞台で美しく

5年 甲斐 凜香

名古屋市立田代小学校（リトルランド）

ながれぼしおねがいたいゆめがある

3年 藤井 新大

名古屋市立陽明小学校（リトルランド）

雪だるま手のひらサイズかわいいな

4年 園原 璃子

〈滋賀県〉

学校法人燈影学園一燈園小学校

きょうりゆうをサイズで分ける冬ほくと 4年 太田 慈

〈鳥取県〉

鳥取市立美保小学校

秋風にさそわれ長い髪を切る 3年 下澤 心香
そつと来てうるさく鳴いて帰る蝉 3年 田中 誠志朗
二才なる弟いわう五月晴れ 3年 橋本 薫
わたげはねふくととんでく白いたね 3年 水田 潤登
すず虫が人の心をひびかせる 3年 園田 啓人

〈広島県〉

安芸太田町立筒賀小学校

ツクサは青くひかかってまんかいだ 2年 藤本 すぐか
シロイルカ水平線を飛びこした 4年 渡辺 菜々緒
光る空のびるひまわり進む時 6年 佐々木 悠貴

〈愛媛県〉

愛媛大学教育学部附属小学校

かんらん車足をくすぐる夏の風 1年 若狭 早

〈福岡県〉

福岡市立赤坂小学校

ここちいいほつぺでわかる春の風 3年 佐藤 志帆

嘉麻市立嘉穂小学校

パパとみた花火大かいと一やじよう 1年 鎌田 朝陽

〈長崎県〉

南島原市立堂崎小学校

どんぐりのトトロ並べる友の顔 5年 松尾 かなな
持久走前行く背中渡り鳥 6年 本多 姫奈

〈鹿児島県〉

南九州市立大丸小学校

秋の空体そうをするくじらぐも 3年 上久保 美羽

ラムネ玉カランと鳴らし花火さく
起立礼てんとう虫も勉強だ

夏祭り子犬の「ココ」はお留守番
バイキング少し欲張る秋のシャケ

伊佐市立湯之尾小学校

さつまいもものの形のうみそだ
きりぎりすはつばにとまってかくれんぼ
こいのぼりみんなでおよぐあおい空
夕方に夕立ぐもがやってきた
さむいあさこたつの中がたこのあし
夏の海カツオノエボシフラダンス

〈台湾〉

崇華小学校

蝶々や空で踊っている舞人
オンライン終わりを告げる秋学期
甲虫郷里を守る兵士かな
蛍飛ぶ未知の未来へ導くか

〈アメリカ〉

ワシントン日本語学校

ホテル飛ぶまたたく光かくれんぼ

中学校

〈大分県〉

玖珠町立くす星翔中学校

花火の夜君と見上げる花畑
ひまわりは前を向こうと誘う花
枯木道靴紐結び震える手

3年 中ノ森 環

3年 中 原 彩 絢

4年 末 永 和 心

6年 大 坪 千 春

2年 井 上 翼

2年 中 間 琉 斗

3年 外 木 場 怜 愛

4年 國 生 慶 至

5年 瓜 生 島 純 大

6年 梶 本 壮 悟

4年 林 宥 妃

5年 蔡 和 軒

5年 蔡 和 軒

6年 楊 子 瑤

3年 松 下 誠 至

1年 佐 藤 まなみ

2年 見 良 津 明 香 里

2年 新 川 太 晴

反射してきらめく机炎天下

溶けてなおきらきらしてる雪うさぎ

受験の日睫毛に溶けた淡い雪

横でみるあなたの肩に白い雪

玖珠町立くす若草小中学校

寒い朝スイッチつけてこたつむり

大分市立大在中学校

立秋と母待つ夜なべわらびもち

北風の少し寂しく吹く日かな

さつまいも食べる幸せ半分個

猫じゃらし色なき風にあおられて

夏の海潮の香りと波の音

ブランコの余韻が響く校庭に

指を差す空で輝くシャボン玉

大分市小中一貫教育校 賀来小中学校

こいのぼり私の恋も昇ってけ

こいのぼりぐんぐんおよげひろいそら

こいのぼり今日の夕飯焼き魚

夏は夜蛍飛びかう初瀬井路

大分市立滝尾中学校

元旦に立ち舞う袖の神楽かな

向日葵の向く方向は未来かな

とじこめたつもりがもれる蛍の灯

風呂の湯の温度を上げる冬隣

こおろぎの声がかすかに部屋の中

ひまわりにつつまれていく君の声

セーターの友達それは静電気

3年 江 藤 紬

3年 小 幡 泉 奈

3年 後 藤 美 織

3年 平 野 葉 菜

3年 河 津 奏 志

3年 國 岡 彩 希

3年 神 志 名 彩 羽

3年 佐 藤 希 風

3年 後 藤 陽 菜 乃

3年 神 田 彩 香 理

3年 田 本 勇 斗

3年 越 智 快 和

3年 櫻 井 愛 莉 澄

3年 吉 松 真 央

3年 安 部 太 風

3年 山 田 篤 志

3年 溝 口 航 世

3年 和 泉 翔 子

3年 三 ヶ 尻 琴 海

3年 田 口 琴 那

3年 阿 部 夏 輝

3年 吉 弘 光 緒

3年 菊 田 彩 葉

卒業式最後のチャイムが鳴り響く
霜柱バリバリとなる音楽会

3年 後藤直哉

3年 佐藤郁人

大晦日あつというまに日をまたぐ

3年 渡来怜奈

夏の水蛇口開けば光る水

3年 関愛美

突然にフクロウが鳴きヒカリ差す

3年 佐藤風薫助

金木犀ほんのり香る甘さかな

3年 小松沙和

サイダーの泡が弾ける猛暑の日

3年 日吉唯歌

ラムネ瓶越しでも君は美しい

3年 佐藤蓮太郎

金魚すくい屋台の光につつまれて

3年 大野壮二郎

水面に映る花火の大合唱

3年 北田旺佑

山眠る押しくらまんじゅう土の中

3年 衛藤瑠南

大分中学校

逃げ惑う河川で泳ぐ濁り鮒

3年 渡辺陽詩

別府市立青山中学校

ひまわりと君の笑顔が映えるとき

3年 脇坂凜々

別府市立中部中学校

雪降るも地面は黒い温泉地

3年 佐々木奏輔

透明の涼しさ感じるラムネ瓶

3年 大村彩夏

中津市立東中津中学校

向日葵の見ている世界光の中

2年 大畠光咲

夕立にぬれていらだつ母の声

3年 熊埜御堂風花

帰り道夏の夕日で染まってる

3年 奥小梅

遠い空入道雲が泣いている

3年 遠矢諭史

夏休みここが節目の受験生

3年 渡邊幸太

中津市立本耶馬溪中学校

雨上がり君が指さす先に虹

2年 上野結加

ひやけどめぬればぬるほどまいこさん

3年 小川愛莉

日田市立大明中学校

明易に窓から空をながめけり

3年 福澤璃子

日田市立前津江中学校

不器用な僕を見つめるもみじの木

3年 佐藤有隼

佐伯市立本匠中学校

秋時雨山に響いた陣太鼓

1年 稗田陽仁

新茶つみ煎った茶葉から香りたつ

2年 川野智久

桜の木根に石を抱き咲いている

3年 川野春香

カヌー乗り笑顔が映る夏の川

3年 稗田美空

臼杵市立東中学校

本塁打打たれ越えゆく夏の果て

3年 高司悠晏

蟬時雨負けぬ駆け足駅伝部

3年 野村悠仁

一晚中街の灯火大晦日

3年 野口真央

竹田市立直入中学校

小春日や休み時間の勉強会

1年 阿南芽衣

一番の紅葉はやはり祖母の家

1年 猪股あかり

ゆるやかに下る坂道桜散る

3年 河井未来翔

友達とはぐれながらも見る花火

3年 佐保滉太郎

豊後高田市立真玉中学校

流れ星願いを言えず過ぎていく

2年 山下愛華

茉莉花の香りでゆらぐ恋心

3年 不死原滯

九重町立このえ緑陽中学校

帰り道夕やけを見てふりかえる

1年 小柳愛理

ふらふらと夕日に酔った赤とんぼ

1年 日野光

夏の空雲が大きく動いてる

1年 佐藤謠羽

紅葉は大吊橋が一番だ

1年 末長穂希

桜舞うスーツに通す大きな手

1年 田中陽菜

春うらら歩幅揃えて背伸びする
 鳴り渡るげたがおどりと夏祭り
 くつなげて明日は虹が見れるかな
 つららけるふるえる足でバスを待ち
 迎春や受験に胸を引き締める
 干柿の向こうにみえる空の色
 未来へとスズメのように飛んでいく
 幼子や母の日傘を持ち出して
 渡鳥未来への道切り開く

1年 手島 和香
 2年 吉光 美冬
 2年 永樂 結花
 2年 佐藤 優月
 3年 恵良 竜太郎
 3年 麻生 良子
 3年 池部 悠太
 3年 佐藤 寧音
 3年 高倉 次郎

〈宮城県〉

岩沼市立岩沼中学校

ソーダ水一気飲みして痛いのだ
 蝉時雨一生懸命生きている
 七五三どこか切ない祝いごと
 星月夜眺めながらの深夜飯

1年 大久 なるみ
 1年 三浦 蒼海
 1年 板谷 悠生
 1年 目黒 星渚

〈埼玉県〉

星野学園中学校

雪降りてかれ木に白い花がさく
 初めてはアニメに映る天の川

1年 安食 めるも
 2年 石井 彩葉

〈東京都〉

品川区立伊藤学園

バスを待つ列は自然と片陰に
 盆休み日陰づたいの小旅行
 父不在鈴鹿八耐母昼寝
 浴衣着た君一目見て息を呑む
 夏休み空に咲く花照らす窓
 夕風の海辺で見つめる水平線

7年 飯田 実咲
 8年 増野 心香
 8年 森口 つばさ
 9年 岩室 友紀菜
 9年 西川 茉凜
 9年 小島 充礼

放課後の西日に向かう帰り道
 冷風も出たらしいのにヘッドホン
 青田に行く汽車の先には雲の峰
 帰り道麦茶飲み干す男の子

9年 長島 亜音
 9年 今井 和奏
 9年 成瀬 誉文
 9年 松山 こもか

〈岐阜県〉

鶯谷中学校

ちちろ虫染みの薄茶に文庫本

1年 岡部 莉央

〈静岡県〉

裾野市立須山中学校

オトシブミ思いよどうか子に届け
 口の中キーンとするよかき氷
 春の蚊が夢の中まで追ってくる
 炎熱や勝どきあげる中体連
 黒南風や見えぬ未来に抱く思い

1年 大澤 愛海
 1年 土屋 梨緒
 2年 田代 礼聖
 2年 花田 恋菜
 3年 井出 陽太

〈大阪府〉

大阪市立長吉六反中学校

道照らす明るいライト冬の夜

1年 トレスマアローリー

〈鳥取県〉

湯梨浜学園中学校

真夜中にホタルが照らす影ふたつ
 五月病心は家でお留守番
 雪積もるその上走る子どもたち

1年 清山 凜
 1年 中川 ももこ
 1年 内田 空哉

〈徳島県〉

徳島文理中学校

お守りをじゃらじゃらつけた受験の日

1年 中村 拓夢

〈福岡県〉

筑紫野市立筑山中学校

見つめれば動いて逃げる秋の雲
 帰り道君の目の中秋夕焼
 バレンタイン机の中を何度見る
 水鉄砲友達めがけてねらいうち
 大根を洗ふ双手は川の冷え
 六百の心一つに文化祭
 先生に写真をねだる夏祭り
 雪降ると家に籠ってこたつむり
 初雪やガラスに写る子供達
 炎天下舞台で輝く管楽器
 籠枕風通し良き祖母の家

2年 松原由奈
 2年 大楠珠寛
 2年 矢口寿広
 2年 長谷川廉人
 2年 樋口謙人
 2年 川原田倅玖
 2年 田中愛莉
 2年 福永竹琉
 2年 山下紗楽
 2年 深草和可奈
 2年 田中慶太郎
 1年 川上奈々
 1年 山本明佳
 1年 結城春花
 1年 中村結歩
 1年 谷川遥希
 1年 東渚未

古賀市立古賀東中学校

秋晴れや風に舞う葉の道しるべ
 木犀の香り漂う散歩道
 孫五人そろい寄せ書き敬老日
 秋深し上着ふわりと通学路
 ぽつぽつと赤い実つける烏瓜
 天高し飛行機雲を指差す子

1年 川上奈々
 1年 山本明佳
 1年 結城春花
 1年 中村結歩
 1年 谷川遥希
 1年 東渚未

〈長崎県〉

長崎市立深堀中学校

暁の空を見上げて袖の露
 春の風ゴールネットが揺れている

2年 一ノ瀬樹
 2年 里蘭柊希

高等学校

〈大分県〉

日本文理大学附属高等学校

卒業式淡い記憶が空に散る
 ワンコイン冷やしパイんに微笑んで
 分かれ道まだ話したい猫の恋
 十一時雲は満月ひとりじめ
 カフェラテの燐る煙や春霞
 ひんやりと甘く広がるソーダ水
 君の頬赤く染めゆく遠花火

1年 山村一路
 1年 川崎瑠架
 2年 前田陽菜
 2年 木村李々
 2年 大見蘭
 3年 丸山美海
 3年 森田心音

楊志館高等学校

音楽を聴き聴き歩く夏の宵
 秋桜や君の瞳に映るほく
 四時間目窓の外行く子猫かな
 天高し緋色に染まる並木道
 肌を刺す寒波や今朝の歩みかな
 海月浮く遊ぶ人なき浜辺かな
 戻り道のどうつ青きソーダ水

3年 中尾大輝
 3年 徳永彩乃
 3年 清水心結
 3年 都甲紗希
 3年 高盛吾仁
 3年 田村未羽
 3年 松川みか

大分県立日出支援学校高等部

ふゆのあさふわふわおふとんさようなら

2年 大塚涼和

〈埼玉県〉

星野高等学校

錠剤を零して白し冬の朝
 新宿も見えるだろうか天の川

1年 嶋原音羽
 2年 高木茉莉

埼玉県立特別支援学校 坂戸ろう学園

寒冷に襲われている綿もよう

3年 櫻田咲良

〈長野県〉

学校法人高松学園飯田女子高等学校

立冬や家族で作る水餃子

2年 田中美佳

鳳仙花幼子の指を染めあげる

3年 藤井優佳

暗闇を走り抜けると彼岸花

3年 藤原陽菜

春風に身を乗せ駆ける通学路

3年 三宅拳智

秋晴れて青空の下笛を待つ

3年 山口光毅

味噌汁の大根片手に帰り道

3年 横内凱

凍鶴の水面の影が伸びてゆく

3年 知野稜平

冬の朝みかんとともに丸くなる

3年 三宅悠翔

空見ると真つ赤な夕焼け赤とんぼ

3年 喜多桜奈

山の上ふるさと囲む桜の木

3年 坂口真悠

寒空に鼻をくすぐるスーパの香

3年 浦川真衣奈

梅雨入りの訪れ天の神知らず

3年 後藤田真央

夜もすがら駅に紅差す彼岸花

3年 佐藤正理

ここに来て彼岸の風の化石草

3年 新開光将

秋寒し青きガラス器いとまごい

3年 瀬野佳乃子

弓始めまっすぐ進め矢とともに

3年 千葉心和

雪国へトンネルつなぐダイナマイト

3年 中田 權

スマホ向け蛍の光乱反射

3年 三好叶人

乱反射水面に映る返り梅雨

3年 森 翔梧

清水寺紅葉の帳に包まれて

3年 工藤 瑠莉花

〈鳥取県〉

湯梨浜学園高等学校

夜闇の窓辺に光る守宮かな

2年 山本健太

扇風機猫が正面陣取った

2年 遠藤礼都

炎天下墨まで走る背番号

2年 近藤寧々

〈山口県〉

山口県立下松工業高等学校

秋澄むや母の着物でお点前を

1年 福田伊織

〈徳島県〉

徳島県立脇町高等学校

落ち栗を飛び越え進む帰り道

3年 荒岡美希

冬景色ちよっと彩る赤い鼻

3年 梶本湖愛



五七五は四季の詩^{うた}
大分県俳句連盟

会 長 吉 原 白 天



玖珠ライオンズクラブ

玖珠クラブ会長テーマ
「知性に基づきクラブ活動の活性化」

会 長 L 工 藤 重 信

幹 事 L 上 田 英 昭

会 計 L 相 良 泰 介



THE MAGIC
OF ROTARY

ロータリーのマジック

2024-25年度国際ロータリーのテーマ



玖珠ロータリークラブ

会 長 斎 藤 淑 子

〒879-4403 玖珠郡玖珠町大字帆足390-3（望山荘内）

TEL 0973-72-0187





一般社団法人

玖珠町観光協会

伐株山

万年山

〒879-4403 大分県玖珠郡玖珠町大字帆足246-13 URL : <https://kusumachi.jp>
TEL 0973-72-1313 FAX 0973-72-1373 Email : info@kusumachi.jp

NOK GROUP



KKK 玖珠NOK株式会社



求人に関するお問い合わせ

TEL 0973-73-1880

〒879-4721 大分県玖珠郡九重町大字栗野 59-1

新栄合板工業株式会社

〒879-4401
大分県玖珠郡玖珠町大字四日市848番32
TEL 0973-77-2112
FAX 0973-77-2113



一般社団法人 くすみち



道の駅 童話の里くす

〈直売所・土産・レストラン・パン・ファストフード〉
〒879-4403 大分県玖珠郡玖珠町大字帆足2121
TEL 0973-72-5535 FAX 0973-72-5591
URL <http://www.kusu-michinoeki.jp>

道の駅 慈恩の滝くす

〈直売所・土産・ファストフード〉
〒879-4332 大分県玖珠郡玖珠町大字山浦618-4
TEL 0973-77-2260 FAX 0973-77-2261

商工会は一番身近な相談所
金融・税務・経理・経営・労働
などのご相談は



玖珠町商工会

〒879-4403 玖珠郡玖珠町大字帆足125-1
TEL (0973) 72-1211
FAX (0973) 72-5712
<http://kusu.oita-shokokai.or.jp/>



旅行代理店

日本旅行JTB 取扱店

JTB パートナー店

旅行のことなら、なんでもご相談下さい。



くす旅サービス

玖珠町大字帆足262-21
(春日町・けんしん前)

TEL (0973) 72-3070

FAX (0973) 72-3090



介護保険サービスセンター

TEL 72-5090

通所・訪問リハビリテーション

TEL 72-5050

(市外局番：0973)

共通FAX：72-6868)

大分県玖珠郡玖珠町大字塚脇113番地13

外科・胃腸内科・内科・小児科・整形外科・リハビリテーション科

医療法人 純和会 小中病院

〒879-4413 大分県玖珠郡玖珠町大字塚脇123

TEL.0973-72-2167(代)・FAX.0973-72-5199

産婦人科・内科・麻酔科・脳神経外科
(血液透析) リハビリテーション科

医療法人 友光会

友成医院

(代表)

TEL 72-0330

TEL 72-1788 (透析)

TEL 72-0550 (脳神経外科)

〒879-4413 大分県玖珠郡玖珠町大字塚脇128-2

大分県

さかもと村

879-4522 大分県玖珠郡玖珠町山下 2224

メール：sakamoto.mura@abelia.ocn.ne.jp

<http://sakamotomura.com/>

村長携帯：090-5297-1489



日田 玖珠に来よう

地鶏のやぶ

電話注文・地方発送
承ります!

本店：TEL 0973-73-8641 (玖珠店)

〒879-4331

大分県玖珠郡玖珠町大字戸畑1209-1 (210号線沿い)



牧野 桂一（まきの けいいち）先生略歴

1947 年大分市生まれ。

1970 年大分大学卒。大分県内の小学校、養護学校に勤務の後、大分県教育センター研究員として教育相談に従事、研究部長を経て大分市植田小学校教頭へ。その後、大分県教委特別支援教育推進室長から臼杵養護学校、大分県立新生養護学校校長へ。その後筑紫女学園大学日本語日本文学科教授、大分大学、東亜大学、純真短期大学客員教授。その間、大分県警少年課大分っ子フレンドリーサポートセンターアドバイザー、大分大学客員教授等を努める。

現在は九州大谷短期大学講師、大分こども発達支援研究所所長。1997 年心身障害児教育財団より「辻村奨励賞」受賞。大谷保育協会認定保育心理士 俳人協会会員 大分県現代俳句協会顧問 俳句結社「天為」「朝鳥」「鷗座」同人。

有馬朗人先生（1930 年－2020 年）のご推挙で、第 32 回全国児童生徒俳句大会（2015 年）より選者となり、現在に至る。

秋篠 光広（あきの みつひろ）先生略歴

1940 年大分市生まれ

1962 年静岡大学農学部卒

1959 年より作句 初学は「馬酔木」「海坂」に拠る

1960 年より飴山 實先生に師事

1961 年澤木欣一主宰の「風」に投句

1971 年「風」同人

1978 年第 23 回「風」賞受賞

1983 年第 29 回角川俳句賞受賞

1990 年「朝鳥」創刊 現在に至る

2002 年「風」終刊により同人を辞す

（公社）俳人協会評議員 俳人協会大分県支部顧問 大分県俳句連盟理事 大分合同新聞社読者文芸欄俳句部門選者 大分合同新聞社俳句教室講師 「朝鳥」主宰

第 41 回全国児童生徒俳句大会（2024 年）より選者となり、現在に至る。

裏表紙の「くるしま童話名作選」とは

明治・大正・昭和にわたり、楽しいお話にのせて、人として生きていくための教えを伝えた教育者久留島武彦の選りすぐりの童話を絵本にしてお届けします。

「くるしま童話名作選」は久留島精神「信じあうこと・助け合うこと・違いをみとめ合うこと」をテーマに、玖珠町が出版社と共に企画出版してきました。

現代の子どもたちが楽しめるように言葉や見開き、読み聞かせた時の耳から聞こえる語感にこだわって作っています。また画家も日本の絵本画家を代表する方をお願いして作画していただきました。久留島武彦先生が大切にしたい「子どもの膝の前の友」として、ぜひ子どもたちに読んであげてください。

※平成 31 年 3 月末で 10 巻が刊行されました。



日本童話祭（久留島武彦顕彰）
第43回全国児童生徒俳句大会募集要項

【目的】「童話の里くす」は、日本の児童文化活動の礎を築いた「日本のアンデルセン・久留島武彦」を顕彰し、児童文化の高揚を図るという主旨のもと、全国より児童生徒の俳句を募集し、すぐれた作品を表彰する。

応募規定	(1) 小学生の部・中学生の部・高校生の部の3部門とする。 (2) 投句は一人3句以内とし、別記投句用紙にて投句すること。 ※団体投句の場合は、所定の総括表を必ず添付すること。 (3) 投句については無料とする。 (4) 投句は有季定型句に限る。季節は自由。 (5) 盗作・二重投句は禁止する。 ※玖珠町ホームページ掲載のメール投句にご協力をお願いします。
募集期間	令和7年9月1日～11月30日(持込：必着 郵送：消印有効)
応募先 お問合せ	〒879-4404 大分県玖珠郡玖珠町森868番地の2 玖珠町 わらべの館内 全国児童生徒俳句大会事務局 係 TEL0973-72-6012 (休館日：毎週月曜日、月曜日祝日の場合翌日)
大会選者	牧野桂一先生 秋篠光広先生 (俳人協会会員「天為」同人) (俳人協会評議員)
表彰式	令和8年5月4日 大分県玖珠町 わらべの館 ※情勢に応じて表彰式が中止となる場合があります。
各賞	久留島武彦賞(1点)※表彰式へご招待(国内受賞者のみ) 朗人賞(1点)※表彰式へご招待(国内受賞者のみ) 紘文賞(1点)※表彰式へご招待(国内受賞者のみ) 桂一賞(1点)※表彰式へご招待(国内受賞者のみ) 大分県知事賞(小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点) 大分県教育長賞(小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点) 玖珠町長賞(小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点) 玖珠町議会議長賞(小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点) 玖珠町教育長賞(小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点) 大分県俳句連盟会長賞(小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点) 大分県小学校長会長賞(小学生の部1点) 大分県中学校長会長賞(中学生の部1点) 大分県立学校長協会賞(高校生の部1点) 読売新聞社賞(1点) ※入賞句の決定は、令和8年3月頃となります。
主催	日本童話祭実行委員会・全国児童生徒俳句大会実行委員会
共催	玖珠町・玖珠町教育委員会
後援	大分県・大分県教育委員会・玖珠町議会・大分県俳句連盟 読売新聞社・大分合同新聞社・西日本新聞社・NHK大分放送局 OBS大分放送・TOSテレビ大分・OAB大分朝日放送



日本のアンデルセンと呼ばれた久留島武彦先生は、明治7年大分県玖珠町で生まれました。

まだ10歳の少年だった頃、武彦先生は毎晩のうちに、近所の日蓮宗のお寺へ説教を聞きに行っていました。彼は、算木で高座の端を叩きながら日蓮上人の一代記を語る、そのお坊さんの達弁のとりこになり、家に帰ってはこたつやぐらの上に座り、繰り返しまねをして家族に語っていたといいます。

「これが今日から考えてみると、私が『話』といふものに一生を繋げるようになったそもそもの端緒をなしている」と彼自身が言うように、この時人に語って聞かせる楽しさを知った少年は、その後、口演童話家への道を歩むことになりました。

また、日本の児童文化活動の先駆者として、日本初の「お話の会」開催や、「児童劇」の上演、「全国版子供新聞」の発刊などに次々と取り組みました。

アンデルセンの故郷デンマークでは、記念館設立に貢献したことで、「日本のアンデルセン」と呼ばれるようになりました。

日本中の子どもたちを魅了し、多大な業績を残した武彦先生の故郷大分県玖珠町では、彼に因んだ童話祭が、毎年5月5日に盛大に開催されています。

「子どもが育たなければ日本の将来はない」と、青少年の教育に生涯をささげた武彦先生の遺志を受け継いで、「全国児童生徒俳句大会」は、俳句を通して児童生徒の感性を育み、豊かな心を培うことを目的に開催しています。



全国初の「童話碑」が建立されて開幕した「第1回童話祭」の様子(1950年5月5日大分県玖珠町にて)

久留島 武彦(くるしま たけひこ)

- 1874年 6月19日大分県玖珠郡森町(現・玖珠町)に生まれる。豊後国森藩藩主久留島家の末裔。
- 1887年 大分中学(現・大分県立大分上野丘高等学校)に入学、英語教師のウエンライト博士と出会う。
- 1890年 ウエンライト博士の関西学院転任に伴い関西学院へ転校。
- 1894年 近衛師団入隊。
- 1895年 日清戦争に従軍。戦地から「尾上新兵衛」の筆名で投稿した作品が雑誌『少年世界』(博文館)に連載される。
- 1906年 「お伽俱樂部」を設立し、口演童話活動を本格的に開始。

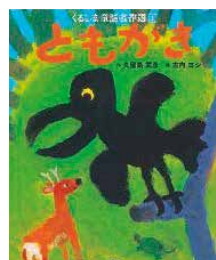
- 1911年 雑誌『お伽俱樂部』を創刊。
- 1924年 ボーイスカウトの第2回国際ジャンボリー大会(現・世界ジャンボリー、デンマーク)に参加し、アンデルセンの旧跡を訪問。アンデルセンの復権を訴え、2年後にデンマーク国王よりダンネブロウ四等勲章を受ける。「日本のアンデルセン」と呼ばれるようになる。
- 1951年 日本青少年文化センター(全日本移動教室連盟)初代理事長に就任。
- 1958年 話し言葉による童話を確立し、児童文化の向上に貢献したことによって紫綬褒章を授与される。
- 1960年 6月27日内臓ガンのため永眠(享年86歳)。日本青少年文化センターが「久留島武彦文化賞」を創設。童話の口演を行った幼稚園・小学校は全国6,000を超える。

発行
日本童話祭実行委員会
全国児童生徒俳句大会実行委員会
発行日 令和七年五月四日

	小学生の部	中学生の部	高校生の部	計
投 句	6,767 句	3,968 句	899 句	11,634 句
入 賞	10 句	8 句	8 句	26 句
特 選	26 句	24 句	16 句	66 句
入 選	160 句	123 句	52 句	335 句

この句集は、入賞・特選・入選の順で掲載しております。
なお、文字表記については、投句用紙に従いました。
学年は投句時のものです。

『くるしま童話名作選』集



『① ともがき』

嫌われ者のカラスは、ネズミと友達になりたいと頼みました。「怖いカラスと友達なんて！」困ったネズミは、仲良しのカメに相談することになりました。カメの助言により、シカも仲間に入れて友達になりました。そんな時に事件が起こり…。

「ともがき」とは、垣根のように分ちがたく、固い絆で結ばれた友達の事です。久留島武彦先生の名作童話の絵本化第1弾！

出版社：子どもの未来社

著 者：久留島武彦(作)・古内ヨシ(絵) 価 格：1,430 円(税込)



『② 子どもいのり』

教会の天井の隅に、2匹のくもの親子が住んでいました。今夜はクリスマスイブ。大人たちが朝早くから集まって大掃除をはじめました…。

親子愛の深さと反省することの大切さ、そして悔い改めようとする者に救いの手を差し伸べる神の慈愛の尊さについての教えが込められた、久留島武彦先生の名作童話の絵本化第2弾！

出版社：幻冬舎ルネッサンス

著 者：久留島武彦(作)・古内ヨシ(絵)

価 格：1,430 円(税込)



『③ ゆめうりふくろう』

「ゆめうりふくろう」は、今から60年まえに書かれたお話です。人間の子どもの見た夢を集め、その夢で森の動物たちを幸せにするふくろうの物語が遠山繁年さんの繊細なイラストで素晴らしい絵本によみがえりました。神秘的でユニークな、そして心あたたまるストーリーで子どもたちを惹き込む

この作品は、彼の数ある久留島武彦先生の代表作の一つです。絵本化第3弾！

出版社：子どもの未来社

著 者：久留島武彦(作)・遠山繁年(絵) 価 格：1,430 円(税込)



『④ トラの子ウーちゃん』

「トラの子ウーちゃん」は、世界各国に赴いて見聞を広げ、それを基に多くの童話を残した久留島武彦先生の「虎の子の大発見」を絵本化した作品です。いたずらっ子のウーちゃんが「怖い人間」見たさにお母さんの言いつけを聞かずに山を下りて出会う冒険の数々が、ウーちゃんを大きく成長させます。読み聞かせにも最適、絵本化第4弾！

出版社：子どもの未来社

著 者：久留島武彦(作)・篠崎三朗(絵)

価 格：1,430 円(税込)



『⑤ すずむし』

「すすむし」は、武彦先生が文学の道を志した22歳のころに書かれた作品です。すがすがしい良い音がなせないお宮のすすが、良い音を出すために修行の旅に出かける、ユーモラスな作品です。日本を代表する絵本画家の黒井健氏の手によって、ひたむきに、真剣に生きることの大切さが、ひしひしと伝わってくる絵本に仕上がりました。読み聞かせにも最適！

出版社：子どもの未来社

著 者：久留島武彦(作)・黒井健(絵)

価 格：1,430 円(税込)



『⑥ ツバメのおんがえし』

ツバメの隼雄がせっせと巣をつくっています。それを見つけて、おばあさんが「おや、これは縁起がいい」と、うれしそうに言いました。昔から、ツバメが巣をつくる家にはよいことが起こるといふ言い伝えがあるのです。

ある日、隼雄が巣を固める泥を探していると、道端の溝の中から、何やらコソコソと話し声が聞こえてきました。そっと降りて、のぞいてみると…

出版社：幻冬舎メディアコンサルティング

著 者：久留島武彦(作)・篠崎三朗(絵) 価 格：1,430 円(税込)



『⑦ 月宮殿のおつかい』

「このままでは、おや子ともどもたべられてしまう。いったい、どうしたらいいのかしら…」狼に狙われるひつじおや子を助けるため、うさぎが考えたある方法とは？“愛”と“勇気”と“知恵”が詰まったうさぎとひつじおや子の物語。

出版社：幻冬舎メディアコンサルティング

著 者：久留島武彦(作)・アヤ井アキコ(絵)

価 格：1,430 円(税込)



『⑧ 海に光るつぼ』

終戦後の日本で靴磨きをする少年ケンイチが、おばさんの家に遊びに行き、海の底で不思議な体験をして成長するお話です。物語を読み終えた時、ケンイチとともに大きく成長した子どもの姿が見られることでしょう。

出版社：幻冬舎メディアコンサルティング

著 者：久留島武彦(作)・ゴトウノリユキ(絵)

価 格：1,430 円(税込)



『⑨ 弾きがえる』

音楽の大きな三きょうだいがバイオリンを弾いていると、音楽の大きなかえるが池から出てきて、たのみました。「うちに来てバイオリンを弾いてください。」さてさて、どうなることでしょう…。

出版社：子どもの未来社

著 者：久留島武彦(作)・市居みか(絵) 価 格：1,430 円(税込)



『⑩ なだれうさぎ』

峠の谷間にくらしている親子が、あるとき、なだれで家ごと埋まってしまう。

おかあさん、たあぼう、ちいこが助けをまわっていると、いっぴきの白ウサギがとびこんできました……。

出版社：子どもの未来社

著 者：久留島武彦(作)・いしいつとむ(絵)

価 格：1,430 円(税込)